

1976

«Antoine Grumbach»

The TOSHI-JUTAKU, n° 7612, december 1976

a monthly journal

エコール・デ・ボザールの校庭で見かける彼の姿は、栗色のくしゃくしゃの髪とまん丸い眼鏡、そしていつも変わらぬ紺のセーターとジーンズ、童顔のうえ、舌たらずの話方で一般学生と全く区別がつかないのだが、今年34歳の割にはよく出た腹がやはり教官らしい貫禄と年齢を感じさせる。そして真っ白のいかにもフランス的なあちこち凹んだVWコンバーティブルに乗って颯爽と立ち去っていく。現在UP6(ボザール第6分校)で建築史と建築論の講座を受け持つ彼は、学生にとってその博識で尊敬され、その難解さで怖れられている存在でもある。旧体制ボザールの最後の卒業生である彼は、その後エコール・プラティックでロラン・バルトについて記号学の都市論的研究、景観と地形の関係についての分析、集落の社会心理学的イメ

自の空間論を展開してきた。

彼の理論の根幹となる<倒置の考古学(Archéologie inverse)>や、<隠れた形象(Figuration cachée)>、<記憶が明らかに必要であるということ>(L'évidente nécessité de la mémoire)>、等の理論は、建築と都市の歴史の記号論的あるいは意味論的分析の上に成り立っているもので、機能主義的建築とその都市計画に支配された状況を、ル・コルビュジエも含めて、真っ向から批判するアンチテーゼである。すなわち、文明とは人間がその生活する空間(あるいは都市)の中で行ってきたあらゆる活動の堆積であって、その痕跡が現実の都市となり、意識化された記憶が歴史となる錯綜した複合現象なのだが、必要なもの以外は切り捨てる近代合理的機能主義は、合目的性と効率を重視するあまり、われ

しのタクシーがやって来ない)電話で呼んでも断られる、急病人が出て救急車を呼んだら道に迷って1時間も経ってやっと着く、全くの標識ジャングルで目的地がわからず荷物の配達ができない、人を訪ねていっても会えないで帰ってきてしまう等々、道路に関するだけでもこの有様なのだ。元来、西欧の道にはすべて名前がついて建物がとぎれる所はすべて道であり、それを追って行く限り目的地へたどりつくことができるのだが、高層アパートの場合は単体建築が道路から大幅にセットバックしているため、彼らは全く違った読み取りシステムの中をさまようことになってしまう。また、夜開いているカフェなど皆無なので、共稼ぎの多いフランスでは住民の出会いの場は余程のことがない限りあり得ないことになる。パリと接し画期的

アントワースの誘惑

ANTOINE GRUMBACH



アントワース・グランバック

メージ等について研究を続け、69年にはストラスブール都市整備計画基本計画に携わりながら、ヴァンセンヌ大学(パリ第8大学)都市計画研究所で教鞭をとり、同時にレ・アール再開発計画についてのレポートをパリ都市計画局へ提出するなど、多彩な活動を開始した。同年秋トロント大学客員教授、コロンビア大学でコンフェランスを行なう等、国際的にもそのユニークな理論が注目され始め、70年以後はUP6教官、マルス・ラ・ヴァレ・ニュータウン第2セクター基本計画を担当し、アトリエ teta を開いて現在に至っている。この間、グランゼコールのひとつである国立土木学校建築部門の非常勤講師をつとめるかたわら、ロンドンのA.A.スクール、エセックス大学、トロント大学、ブリストン大学等でコンフェランスを行ない、独

われに意識されない内的不安を孕み続けている。それはわれわれが歴史的にあるいは経験的に環境の中から無意識に読みとっている既存の意味体系を、人間とは関係のないシステムに置き換えてしまうことから起こるコンフリクトであって、現代社会にあってはすでに慢性化した欲求不満のひとつに数えられてしまう。

ことに何も無い野原に突然出現するニュータウンの場合などは、全く意味体系の不毛地帯となってしまう、その結果、フランスにおいてもこれらの地区では旧市街に比べて犯罪件数が倍増したり、青少年の非行化が目立ち、重大な社会現象として認められはじめている。大衆紙フランス・ソワールにはラ・デファンス地区の住民の不満がたびたび大々的に取り上げられている。たとえば、タクシーがつかまらず(流

計画であるはずのラ・デファンスですらがこの始末なのだから、まして移民労働者の多い地方工業都市の郊外ニュータウン等ではフランス人にとっての人間らしい暮らしとは異なるものを強いられるわけだ。

このような状況をいかに解決するかは、すでにチームX以来の都市計画家の目標ではあったが、しかし、現実の都市と向かい合うとき、われわれが近代性という名目のもとに引き換えてきたものがあまりに大きなものであったと気づき始めたのは、環境変化が、おそらく、社会感受性というような何物かの許容限界を超えたためであろう。

グランバックは戦後の復興のさ中に成長した世代である。彼はその成長の過程で、新しく建てられるアパート群の灰色の壁に何の物語も

読みとれないことをもどかしく思ったのであろう。そして、パリの、黒ずんだ石の、あるいはページュの壁のやわらかさやあたたかさ、きざみ込まれたさまざまな植物や怪物や偉人たちの織り成す物語に親しみながら、近代性が彼の内的世界を侵害していくことに重大な危機感を抱いたに違いない。彼は「記憶が明らかに必要であるということ」を例証するものとして次の4つの要素を挙げている。それは、フランスという時空間の中に堆積した歴史の視覚的断面として理解できるいくつかの風景であり、日常的には何事もなく忘れられつつある物たちである。

明らかに必要な幾何学的整然さ—並木

並木を横したようなメトロの橋脚の列柱は、それが自然に馴染んだ時、それはあたかも自然であるようになる。そして、この並木の建築の概念はわれわれに、直線的単純さがいつも同じでありながら異なっている空間の複雑さを感じさせる。

明らかに必要な痕跡—時間のフラグメント

街角にみられるさまざまな侵蝕された断片。永遠に同一な使用目的のためにすりへたそれらの断片は、その材質が時間の愛撫を受けて年老いていくことを証言している。そして、これらの石像や円柱であった石は、建築が年老いることを知らなければならないことを懸命に示している。

明らかに必要な建造物の永続性—空虚な台座

パリに散在するこれらの台座は私にとって建築の原点 (degré zéro de l'architecture) を示している。それはこのオブジェがひとつの目的を与えられる以前と以後の空間を示しながら、すべての再使用のために開かれているからだ。明らかに必要なすてにそこに在ったということ—ドルメンと家

この、途方もなく奇怪に馴染み合った組み合わせのイメージの中に、「住むということ」の真実がある。絶望のなかに打ちくだかれたさまざまな全てを過去に持たない都市の観念論というものはあり得ないのだ。この巨石建築と農家の共存は、すでに建てられた土地の上に建てるべきであることを執拗に証言している。

グランバックにとって、現実の都市とは、これらの真実によって初めて裏づけられる。そしてみなし兎のように突然生まれてくる哀れなニュータウンに、彼はその生いたちを与えようとしているのだ。あたかもわれわれがその祖

先のことを知りたく思うア・プリオリな欲求を捨て去ることができないように、都市にも伝承すべき歴史がなければならないのだ。〈倒置の考古学〉はそれ故、上記の4つの要素を配列し現実をより現実らしくする手法といえようか。彼のレトリックは絶対的虚構が相対的真実でもあり得ることを示しているのだが、それは極言すれば、時間に侵蝕された過去のステレオタイプでしかない。しかしそれらが新しい環境の中で新しい使用目的を与えられ同化されていくプロセスを、彼は方法論として目論んでいる。そして、意味と、歴史と、新しい用途が、複雑に混じり合った有機的空間のみが、新しい都市を支え得るのだということを主張し続ける。

合理的そして機能的である為に新しい形態、あるいは形式を求めて熱狂した時代はすでに終わっていることをわれわれは認識しているであろう。発見し尽くされたそれらの形態を組み合わせ、現在の世界に同調させなければならない調和の時代にわれわれはさしかかっている。建築家はそのような意味と形と質をひとつの確固たるイメージとして表現し伝達しなければならないはずだ。—それ故グランバックは、建築の表現手段にまで言及し批判することになる。すなわち、彼のいう「隠れた形象 (figuration cachée)」とは、建築家のイメージと建築製図に表現されるものとの乖離が、一般には理解しがたいもの、専門家のみには解読できる謎めいた紙切れとし、建築家を一種の閉ざされた秘密集団、機能主義を代表する職能集団におとされたことに対する批判なのである。実際、線のみで表わされる平面、断面からその空間をイメージすることは容易ではなく、パースペクティブでも、一点からのヴィスタを強調するのみで真実の空間はその陰にかくされてしまう。アイソメにしたところで、われわれが実際目にする空間を表現することは到底できないのである。

彼の言葉を以下に引用しよう。

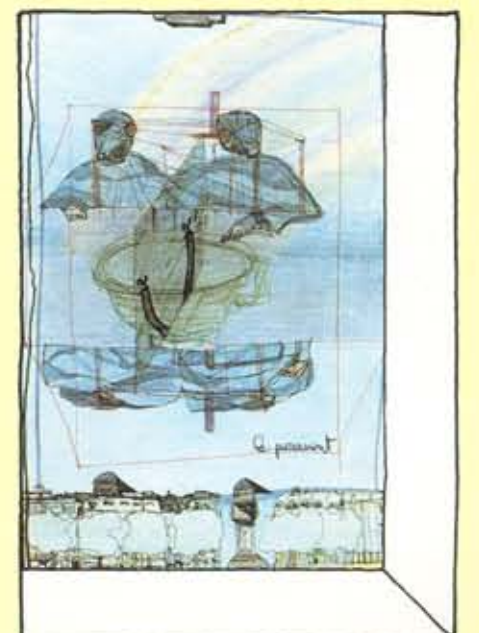
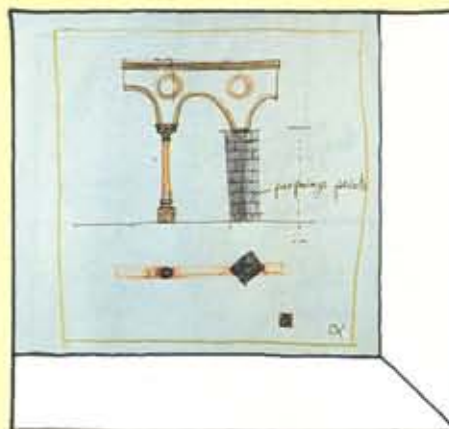
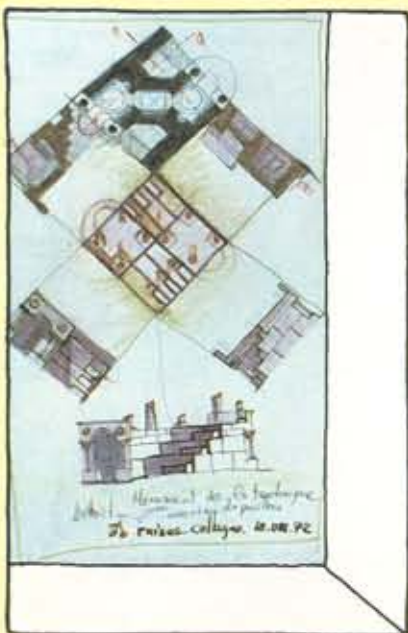
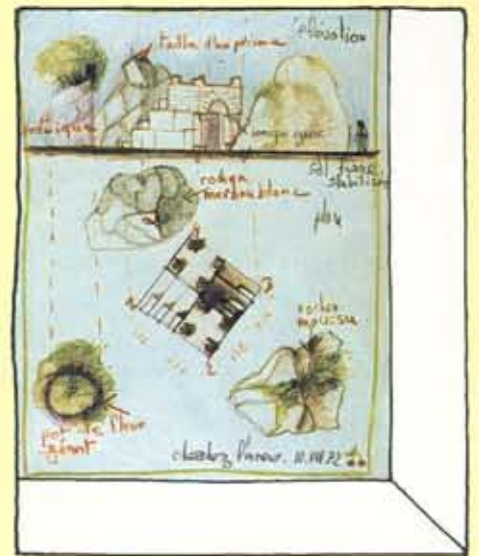
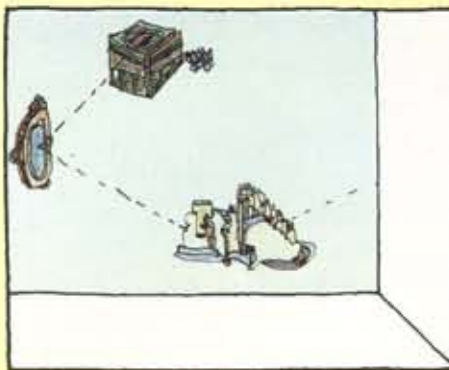
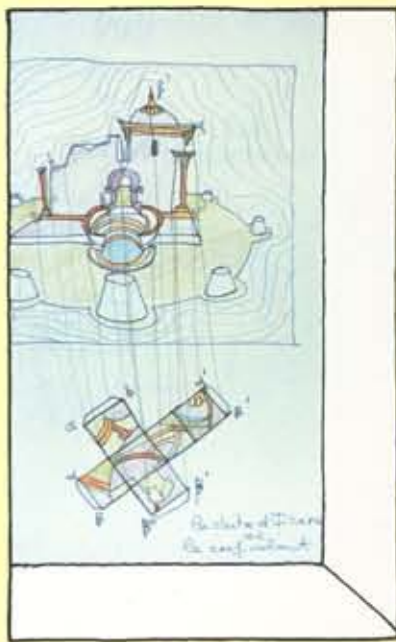
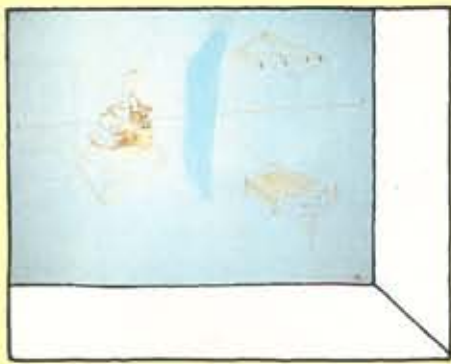
〈それはまさに体操の練習のようなものだ、つまり、平面図は立面とともに眺めなければならないということを感じさせたい、そういう目眩をもよおす錯乱による不安が、幾何学のうわべだけの確かさの裏で、それらの線や消し跡の数々をよぎっている。ところが、立面図というものは、昔の学説では、立面 (orthographique)、正射影 (projection orthogonale)、あるいは、つづり方の法則 (注: loi réglant de l'écriture des mots orthographe のことを洒落ている) と

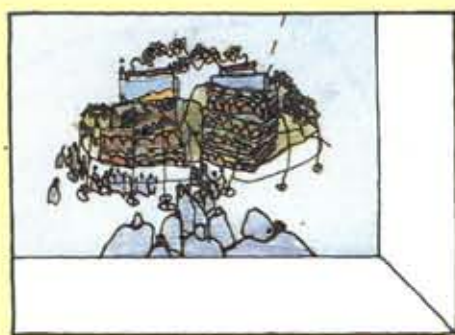
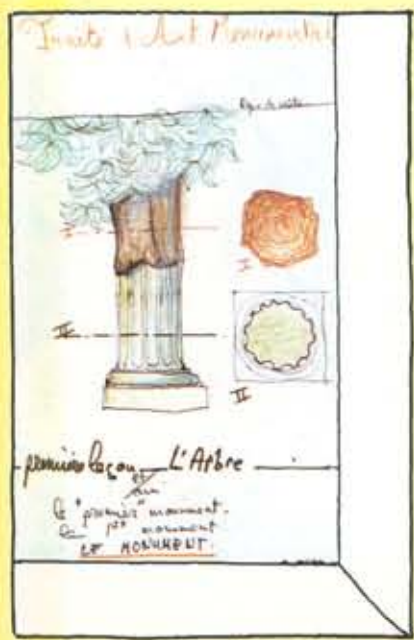
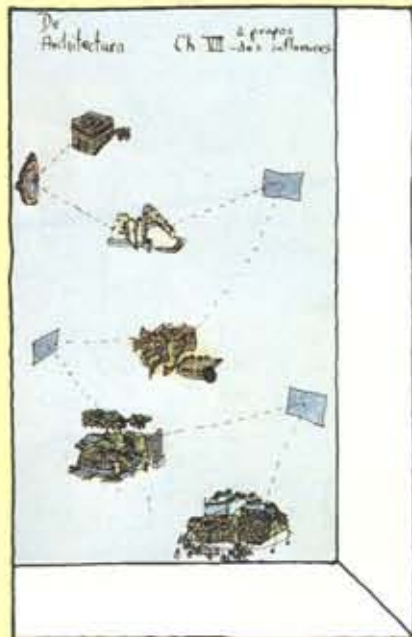
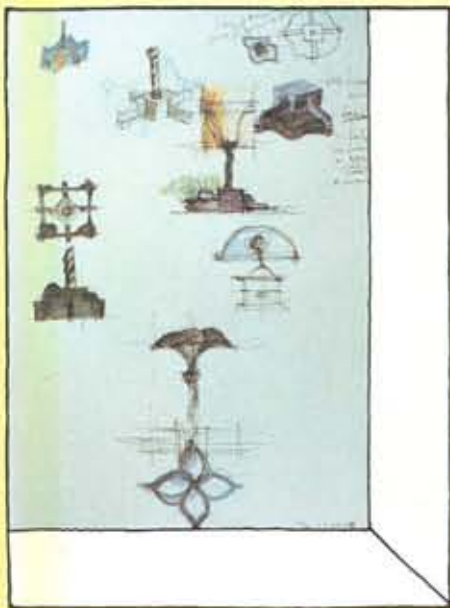
呼ばれているのだ。

平面図の本当らしくないことに因われるために、建築の図面なるものは、その道の達人のみに許される隠れた形象による処理〈平面図〉、あるいはひとつの眼差しが無限であれかしと折る諸韻〈立面図〉といった魔術的修練に身を委ねていることを、たちまちにして理解することができるだろう。このような秘密の一派が今日、建造物の視覚的効果がアクセサリーになりさがってしまった図面を眺めることに満足を感じるの一体どうしてなのか説明に事欠くだろう。建築行為とは、図面が建物になる時に被るこの喪失を具体化することなのだろうか。つまりは、他との関係ゆえに必要とされるつまらないものを実践することになってしまう。……〉

彼は自然と歴史と人間の三位一体を唱えながら、実践として、彼自身「体操の訓練」と名付けるユニークなデッサンを描いている。それらは彼自身の歴史のフラグメントであり、彼が思い描く世界の一断面でもある。想像力は、そこではあらゆる批判や取り合わせや名状し難いもの、不可視のイメージを描き出し、グレーを思わせるそのナイーブな線や色彩がわれわれに直接的に訴えかける。合理的ではないが、確実な何かを求めようとしているのだ。それは、フランスという国が歴史的に示してきたユートピアへの強い指向、何度も市民革命を惹き起こさせるエネルギーに満ちた批判精神とに裏づけられている。フランスが過去に生んだ革命的建築家たち、歴史の中にユートピアのイメージを見出そうとして古典と未来との理想的混淆を創造しようとしたブロー、ルドゥー、ルクー等と同一の態度がグランバックにも見受けられるようだ。彼は、歴史家として先達の方法の有効性を見出し、理論家としてその新しい文法とレトリックを編み出した。そして実践家として都市の再興を試み始めたところである。このような新しい種族に属する作家をわれわれはアーバンデザイナーというよりも、spatio-temporel designer と呼ぶべきであろうか。

(古林 繁)

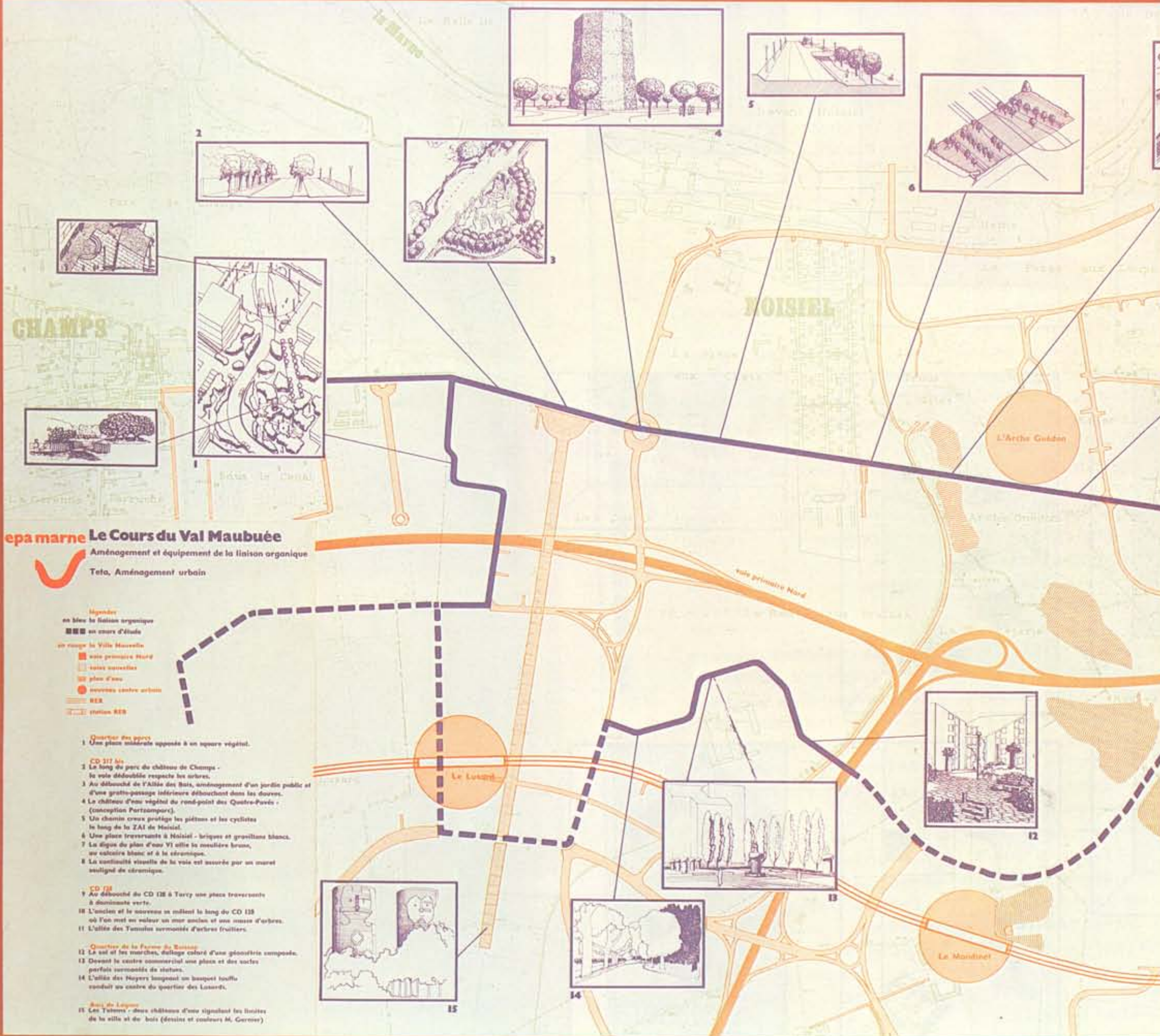
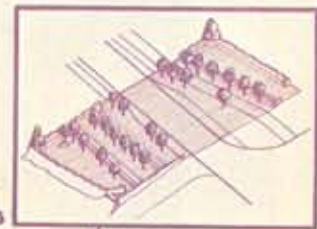
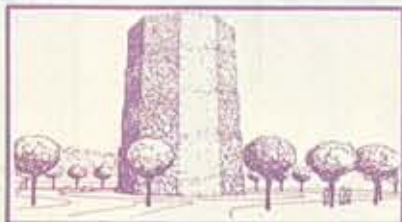


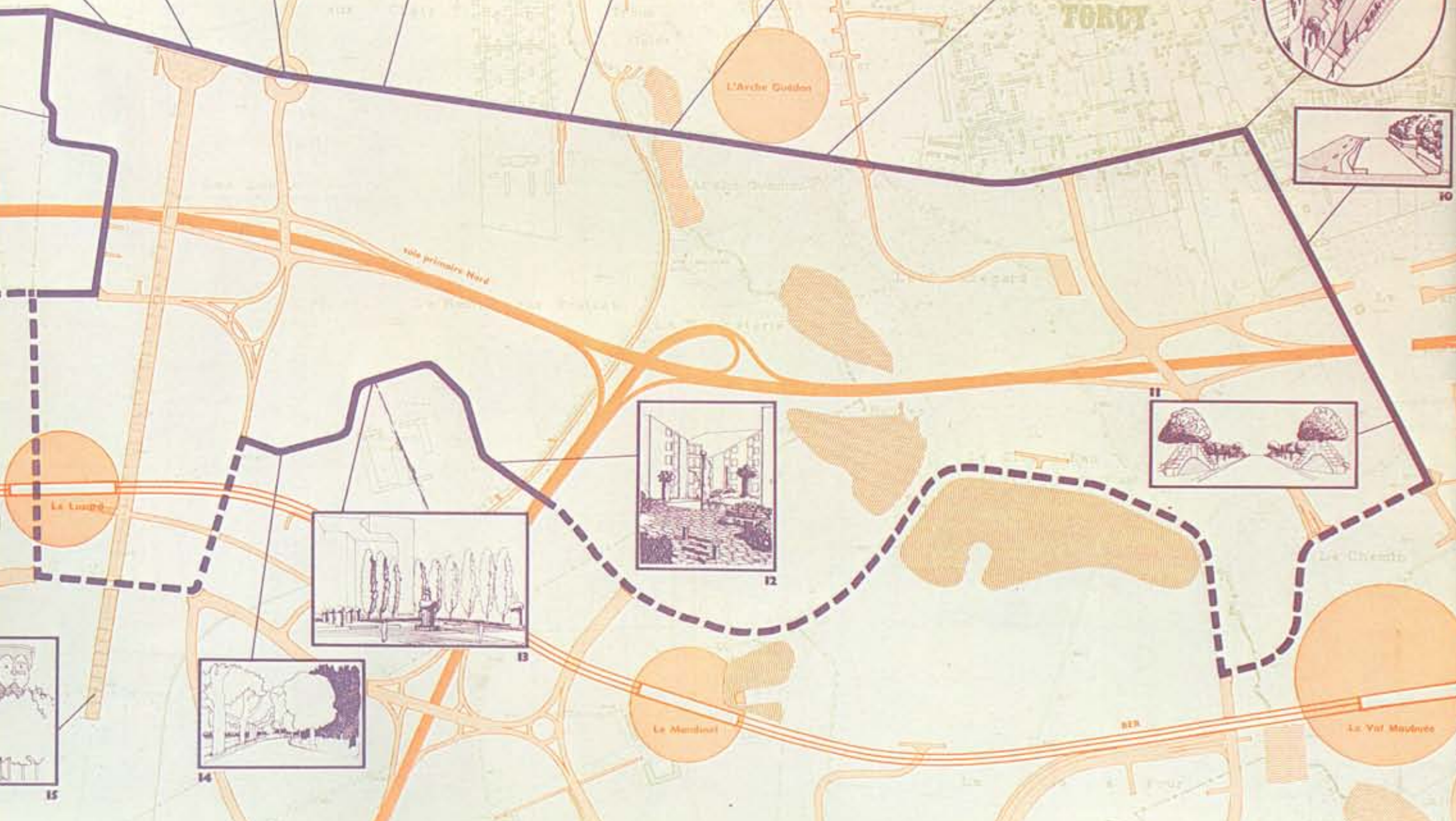
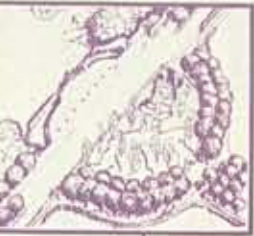
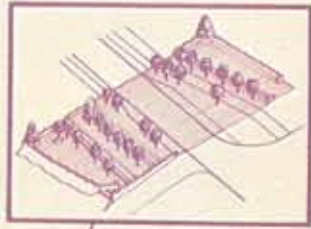
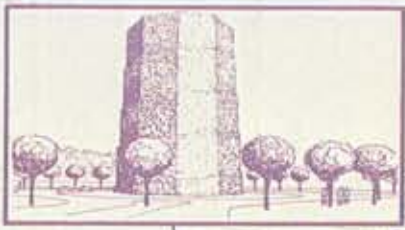


epa marne **Le Cours du Val Maubuée**
Aménagement et équipement de la liaison organique
Telo, Aménagement urbain

- Légende**
- en bleu la liaison organique
 - en orange d'étude
 - en rouge la Ville Nouvelle
 - voie primaire Nord
 - voies secondaires
 - plans d'eau
 - services centraux urbains
 - RER
 - stations RER

- Quartier des parcs**
- 1 Une place latérale ouverte à un square végétal.
 - 2 Le long du parc de château de Champs - la voie dédoublée respecte les arbres.
 - 3 Au débouché de l'Allée des Bois, aménagement d'un jardin public et d'une grille-passage inférieure débouchant dans les douves.
 - 4 Le château d'eau végétal du rond-point des Quatre-Pavés - (conception Portzamparc).
 - 5 Un chemin creux protège les piétons et les cyclistes le long de la ZAI de Noisiel.
 - 6 Une place traversante à Noisiel - briques et gravillons blancs.
 - 7 La ligne du plan d'eau VI relie la meulière brune, au calcaire blanc et à la céramique.
 - 8 La continuité visuelle de la voie est assurée par un muret souligné de céramique.
- CD 138**
- 9 Au débouché du CD 138 à Torcy une place traversante à dominante verte.
 - 10 L'ancien et le nouveau se mêlent le long du CD 138 où l'on met en valeur un mur ancien et une masse d'arbres.
 - 11 L'allée des Tumulés surmontée d'arbres fruitiers.
- Quartier de la Ferme du Boisau**
- 12 La rue et les marches, dallage coloré d'une géométrie composée.
 - 13 Devant le centre commercial une place et des voies parfois surmontées de statures.
 - 14 L'allée des Noyers longeant un bosquet touffu conduit au centre du quartier des Losards.
- Bois de Loigny**
- 15 Les Tulems - deux châteaux d'eau signalent les limites de la ville et du bois (dessins et couleurs M. Germe)





NOISIEL

FORCY

L'Arche Guillon

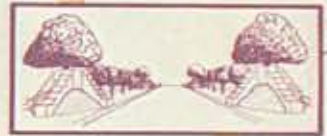
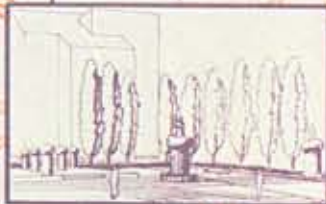
voie primaire Nord

Le Loup

Le Mandinet

Le Chénit

Le Val Maubert



マルヌ・ラ・ヴァレ計画案

Ville Nouvelle de Marne-la-Vallée

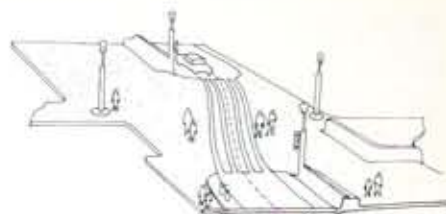
けた広大な地で、森、庭園、シャトー、さらに自家用飛行場までも含む変化に富んだいかにもフランス的なのだかな郊外であるが、パリの将来の発展にそなえて計画人口50万のニュータウン計画が着々と進行中なのである。

グランバックとTEETAは1970年以來マルヌ県都市計画局と共同して、その第2セクター（約12万人）の基本計画を担当している。

60年代にはなばなく行なわれた、ラ・デファンス計画やイタリアー地区再開発は、ヒューマンスケールを越えた単調で空疎な生活環境しかもたらすことができず、結局パリ市民の噴々たる不評を買うのみにとどまり、機能主義的都市計画手法は今後変更をせまられることを余儀なくされるに至っているが、マルヌ・ラ・ヴァレではこのような状況を打ち破るべく、グランバックの唱える「倒置の考古学」のネットワークの上で、ニュータウンの建設を試みることになった。

アパート、テラスハウス群の建設は低賃金住宅団（H・L・M）や民間プロモーターに委ねられ、すでにいくつかの建設も始められている。グランバックはそれに先立って明確な都市のイメージを与えると同時に、さまざまな都市要素を有機的に連結しうる一種の町の目抜き通り、クール・ド・ヴァル・モービュエ（Cours du Val Mauboué）と名付けられた環状並木道の建設を決定した。そしてこの並木道の、トン、ノワジエ、トルジー等の既存集落と郊外高速鉄道（RER）沿線の新しいシティ・センターとの連結点には、さまざまな外部空間デザインが展開され、意味論的連環のなかに各々の街区的アイデンティティが読み取り得るような緻密な配慮が払われている。この点が、近代都市計画とは一線を画することになるのである。つまり一般的フランス人が慣れ親んだ都市スケールを導入し、自動車、自転車、歩行者が共存し得る、楽しく美しい道を作ることに、そしてそれらが意識レベルで過去から現在に至る歴史的堆積をあわせ持つフランス的アービニティを与えるという、盛り沢山の要請を満たすことをそのレゾン・ドールとしているからだ。フランス人にとって、殊にパリ市民にとっては、彼らの都市の豊穡な歴史の堆積に比べると、近代建築の単純な空疎な立体的連続はもはや足が地につかない儼いもの、健全な都市環境の秩序を乱すものでしかない。特に、ジスカールデスタン大統領自らが、建築および環境の質は公共の利益に関するものであるとの態度を強く打ち出し、パリ市内での高層アパートの新たな建設を全面的に禁止してしまった事実も、保守的というよりも、むしろフランスの伝統的生活様式に立脚した価値観に基づくものであり、都市の外部空間とは、彼らにとっては単なる移動のための道や壁に区切られた隣間ではなく、日常的な社会生活の多種多様な出合いを演出する華麗な舞台でなければならないからだ。

それ故、グランバックは、このニュータウンに中世都市の城壁を想わせるうねり曲った並木道を、あたかもパリのブルヴァールのように、過去のコミュニティの痕跡の如くに設定し、その道筋に性格を異にした



断面街道

色々な広場、小公園を散りばめている。この手法は、都市が歴史の自律運動として形成されていくプロセスを取り込んでいるのだ。彼によって新たにデザインされたアーネスト・モー風の街道は、これらの不連続な空間をつないでコミュニティとして完結するうえで重要な役割を果たしているとともに、その3mという高さが歩行者に与える視覚的効果やなじみ易さも、アービニティを与えるものとして特筆されなくてはならないであろう。また、住居地区周辺や広場にもつけられる横断歩道は、むしろ横断車道でなければならないという論理がたつぬかれ、舗装材質の変化や並木の樹種を変えたり利り込み方を変えたりして視覚的にサインを与えてから、カーブによって自動的に減速させる手段も、人間と自動車が共存していく上で有効な方法であろうと思われる。そして、古代遺跡を模した池の堤のプロムナードと、チュムリ（古代の塚、古墳）の並木道は、このニュータウンに先行した古代都市のイリュージョン、倒置された考古学を与え、これらのコンプレックスが織り成す時間と空間の渾然とした人間の空間、すなわち「都市」を出現させることを可能にするのだ。



マルヌ・ラ・ヴァレの地区

パリからヴァンセンヌの森を抜け、東高速道路（A4）を約20km、その辺りからニュータウン、マルヌ・ラ・ヴァレが緑の中にその色とりどりの住居群を見せ始めてくる。ここはセーヌの支流マルヌ川沿いにひら

左頁註説明

上より 計画中/北部河川（既存）/新築道路/木城/新規都市センター/郊外高速鉄道/四脚

公園地区

1 植栽をしたくやわらかい「公園」とくわいた「広場」をコントラストをつくる。

217 bis 号線

- 2 ションの城郭の庭園に連なる、二重の木柵。
- 3 並木道へのジャンクション。公共庭園およびプロット道路の整備。
- 4 キョトス・バグのロンボワンに建てられる給水塔（中世ファンパルグ設計）
- 5 ノワジエの団地の橋をかすめる道は、歩行者用および自転車用の道路を設ける。
- 6 ノワジエの「甘道」広場。棟瓦および白砂利。
- 7 木城に沿った堤。植石および白石状セラミック。
- 8 セラミックを面に敷きつめた小壁により、視覚的効果を高める。

128号線

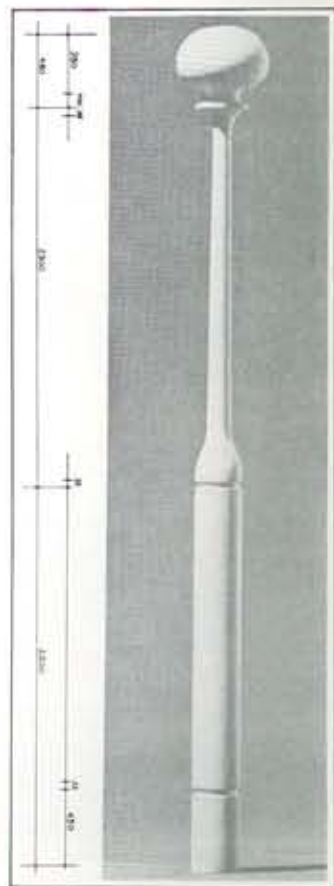
- 9 トルジーの128号線起点には、「甘道」広場を設ける。（緑の広場）
- 10 古い型と樹木が併り重なり、新田が混じり合う。
- 11 チュムリユエの道。地帯の並木道となる。

ピュイソン農場地区

- 12 石壁は幾何学的に構成され、色彩鮮やかとなる。
- 13 曲壁センターの側に広場を設け、彫像、台座を配する。
- 14 ノワイユの道。樹幹とした樹林。

ローニユの森

- 15 給水塔をトーチナム・ボールの如く装飾し、町と森の境界を示す。（デザイン：ガルニエ）



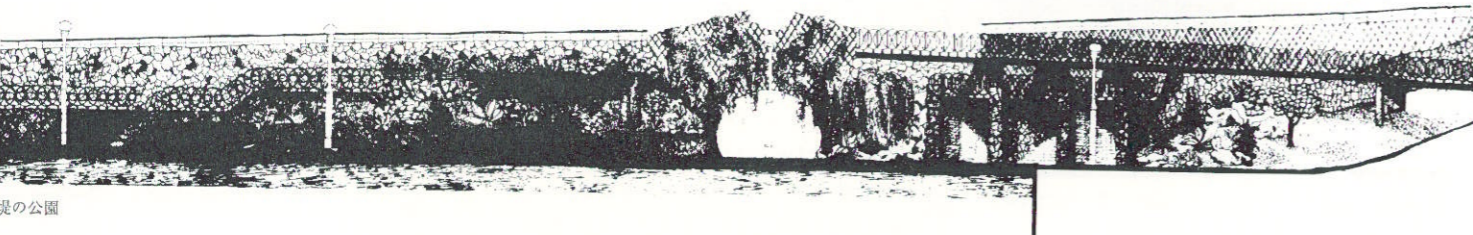
彫像

堤の公園

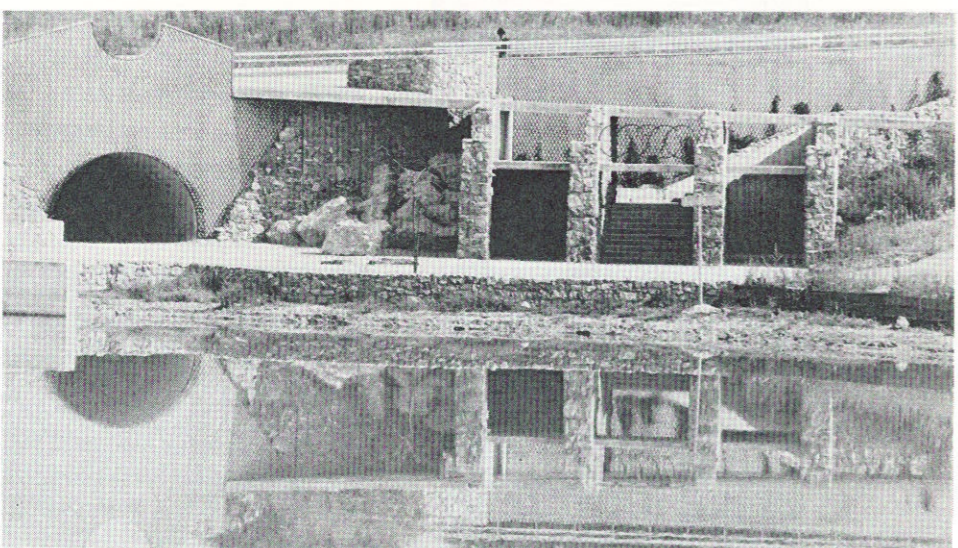
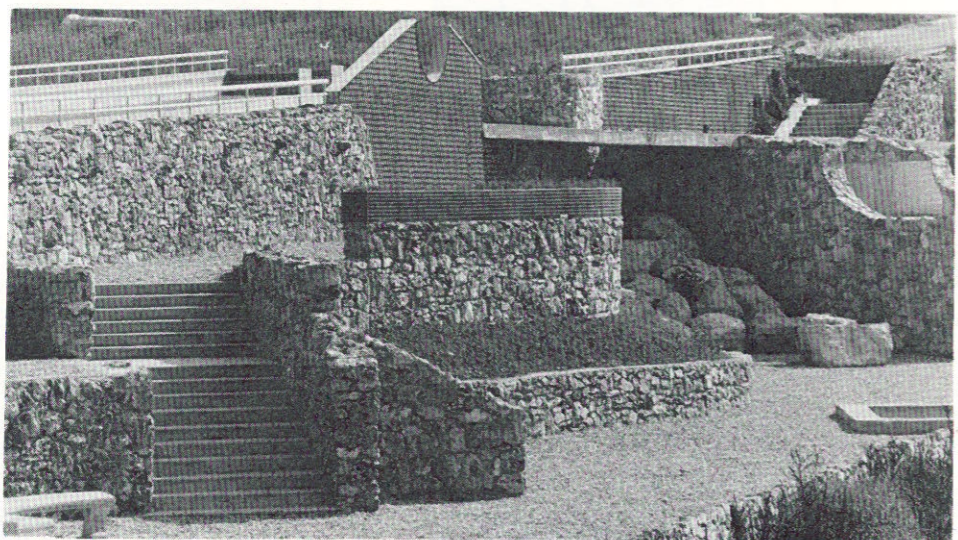
Digue du plan d'eau

ロンボワンからクール・ド・ヴァル・モービュエは東に向かってゆるい下り坂になり、分断された2つの池を見おろしながら進んでいく。まわりを芝生とうねった散歩道にかこまれた、この何の変哲もない池は、道路側をコンクリートの低い壁で遮蔽され、ドライバーにとってはベルシャン・ブルーのタイルの1本の帯だけがなにごとかのサインを送っているのみである。しかしこの壁の裏側で〈倒置の考古学〉は静かにマニフェストを繰り返している。中世の堡塁を思わせるような、あるいはローマの遺構のような半円形の赤い珪石の壁が、上部にブルーのタイルで囲まれた植込みを載せて連続したテラスを形作っている。白い大理石の階段とやはり白い砂利を敷かれた池畔のプロムナードが、赤い珪石と綺麗なコントラストをつくり出す。2つの池をつなぐトンネルの上部は、木製の格子を打ち付けられて、いずれ葛に覆われるであろう。中世教会の後壁を思わせる4枚の壁の間には、道路から導かれる階段が隠され、その上を自転車用のスロープの金属性円形手摺が折り重なりながら横切っている。

この虚構としての小広場は、まもなく葛やその他の植物に覆われながら自然の一部となって住民の憩いに供される。あたかも本来の役割を剝奪されながらも歴史の中に身を横たえ、現代に再生された過去の一証言として、グランバックのレトリックがそのまま空間化されている。それは《すでにそこに在った》多様な歴史の痕跡が、新しい用途の為に開かれて現代と共存する空間であり、ニュータウンが自然に根を下ろすきっかけなのだ。確かに、一種の不思議な調和を与えながら、池の面に影を映すこの広場が、住民にどのような意味を投げかけることができるのか。それを知るためには、自然がその赤い石の壁を侵蝕し、緑と混じり合う時を待たなければならないであろう。



堤の公園

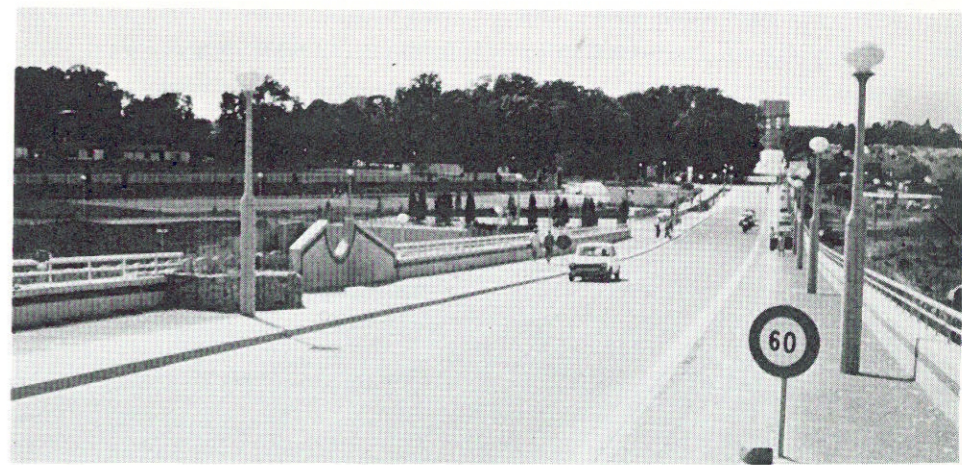
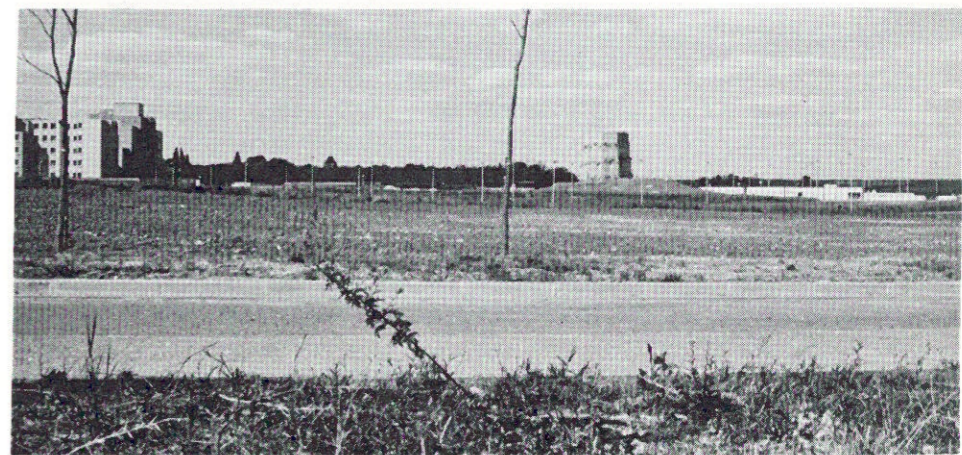
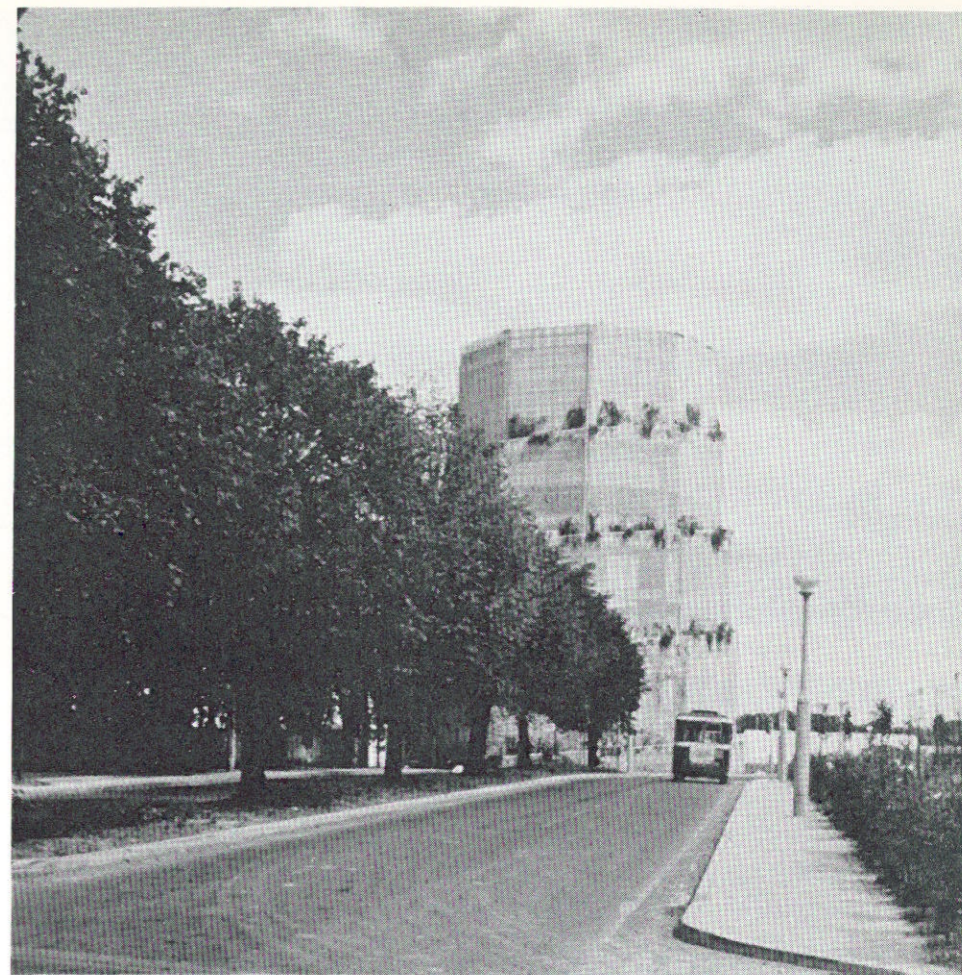
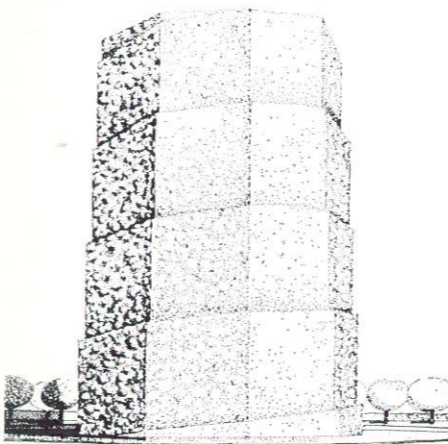


バベルの塔

Château d'eau

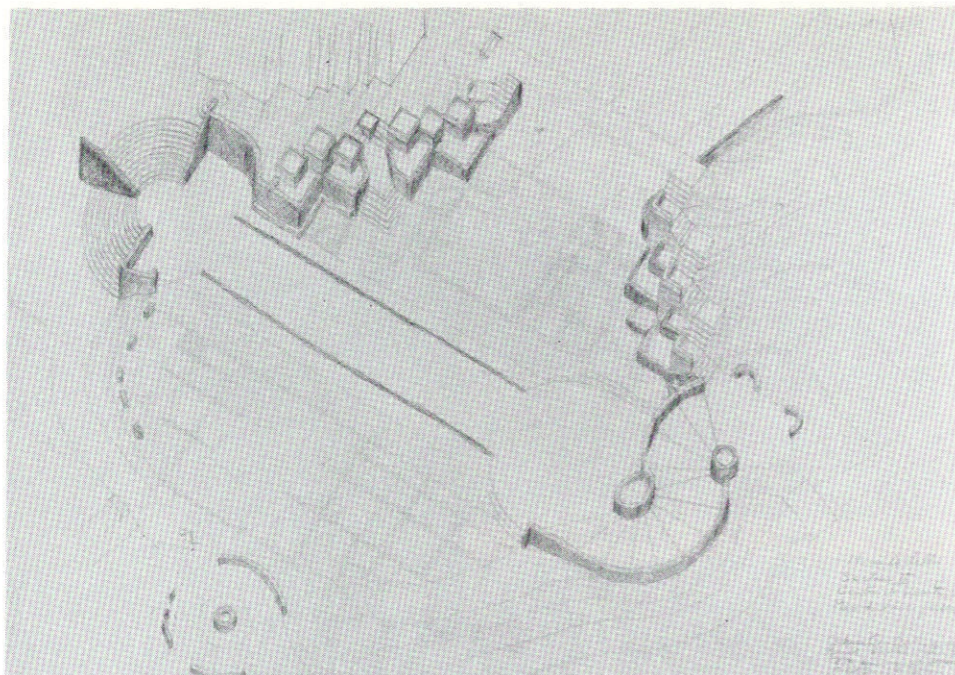
ニュータウン計画地域の西端にシャン (Champs) の小さなシャトーがある。このシャトーの前を通過するあたりからクール・ド・ヴァル・モービュエ (ヴァル・モービュエの環状並木道) が始まる。この、それとわかる変化は、両側と中央の並木そして特徴ある街燈とで一挙に整備されたひとつの都市空間に高められていることにより認められるのだが、なによりもこの道の正面つき当たり、カットル・バヴェのロンボワン (円形交差点) 中央に屹立する、バベルの塔を思わせる形態、真っ白なグリルで被覆された給水塔の形態を見る時にそれは明確になる。

これは以前グランバックと同じアトリエのメンバーの1人であったクリスチャン・ド・ホルツァンバルクの手による設計であるが、一種の驚きとも讃嘆ともつかぬ不思議な感覚を与えられる構築物である。将来はすべて葛に覆われ緑の小山ようになって、斜路は一般に開放され、上層には展望レストランができる予定になっている。古代バビロンがその文明の高所に築きあげようと試み、ついに果たせなかったユートピア、古代神話の謎と歴史のロマンとさまざまなアイロニーを同包するこの給水塔は、そのモニュメンタルなスケールによって、またその意味によって、ニュータウンにとってまさしくシンボルそのものになるであろう。バベルの塔が緑につつまれて現代に存在すること、それはわれわれにユートピアへの人間の意志の永続性のアレゴリーを伝えようとするものであろうが、いずれにしても、ひとつの求心的空間を明らかに創り出しているのだ。



アルシュ・ゲドン広場

Place de l'Arche Guédon



堤の広場を見下ろすアルシュ・ゲドンの丘にヴァル・モービュエ並木道を跨ぐ風変わりな広場がまもなく創り出されようとしている。

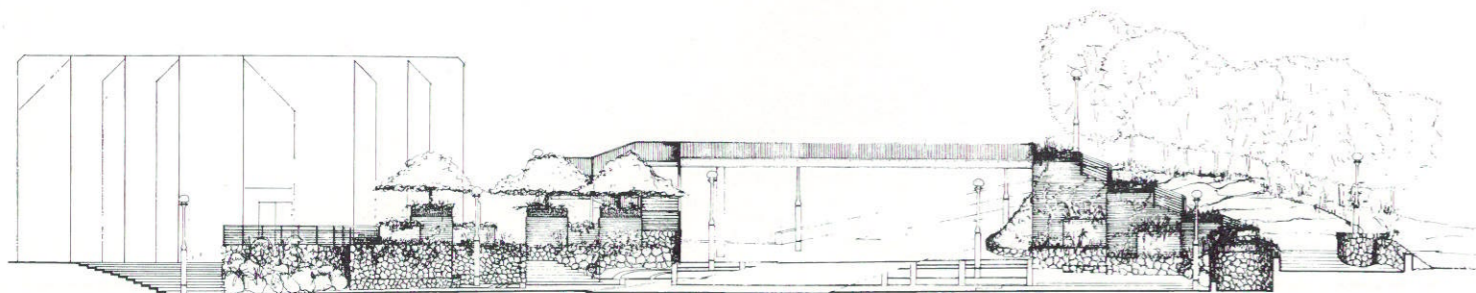
この広場は道の西側の学校群、商業センターと住居群を結ぶため、横断歩道と歩道橋の機能をあわせ持っているが、そこに歴史的秩序を導入することにより複雑な空間を現出させている。一番低い部分は、古代ローマのレスリング場を模した緑とピンクの石のモザイク風舗装で道を斜めに横切り、横断歩道としてのサインを与えながら、この場所に先行して在った仮空の、最古の廃墟を示している。その両端にはローマ劇場風の半円形階段が、ゆるやかな斜路に継がれ、そこからうねりながら上方へ導く浪漫様式の庭園に変化し、道路の西側の斜面は中世の城塞のように折り重なる壁が階段を隠しながら下を見下ろしている。このレンガの壁も堤と同様、その上端をブルーのタイ

ルで覆われた植込みを持ち植物に埋められるようになる。そして最高部にかげられる歩道橋には、近代性のシンボルとして、最も俗悪な大量生産の手摺が使われることになった。この小公園に見られる4つの時代の断層は、物理的な軸としての道路を取りまくようにスーパーインポーズされ、あたかもこのニュータウンに先立って在った過去の証言が、道路という現代の用途のために蒙った裂目のように表現されることになるだろう。ここでもまた、新しく作られた歴史は、

その意味論的構造により現実の時間的プロセスを逆転させ、このニュータウンにひとつの根拠を与え得るものになるのである。これらの作られた過去の証言は、すべてが緑に蔽われた時にその実在性を獲得し、初めて完成することになるのだ。ここには都市というもの存在の根本に関わる時間的連続性が、新しい都市に引き継がなければならないという、グランバックの一貫した態度が明確に表現されていると言えるだろう。



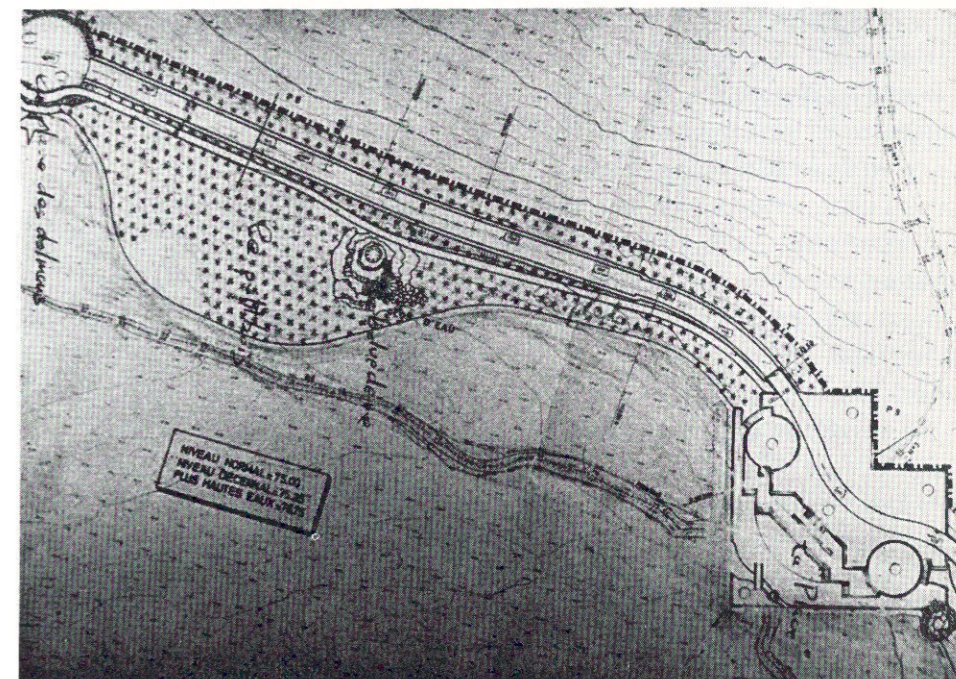
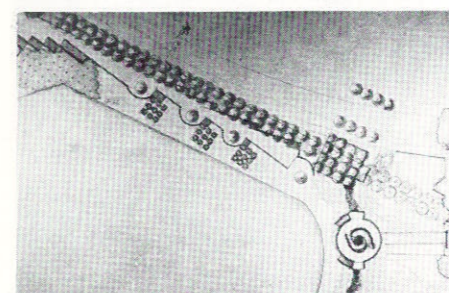
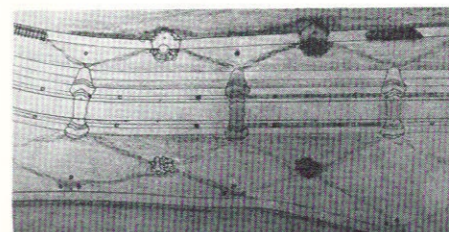
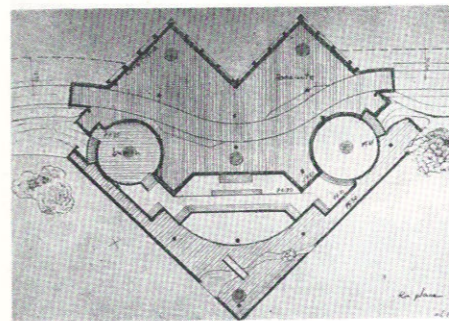
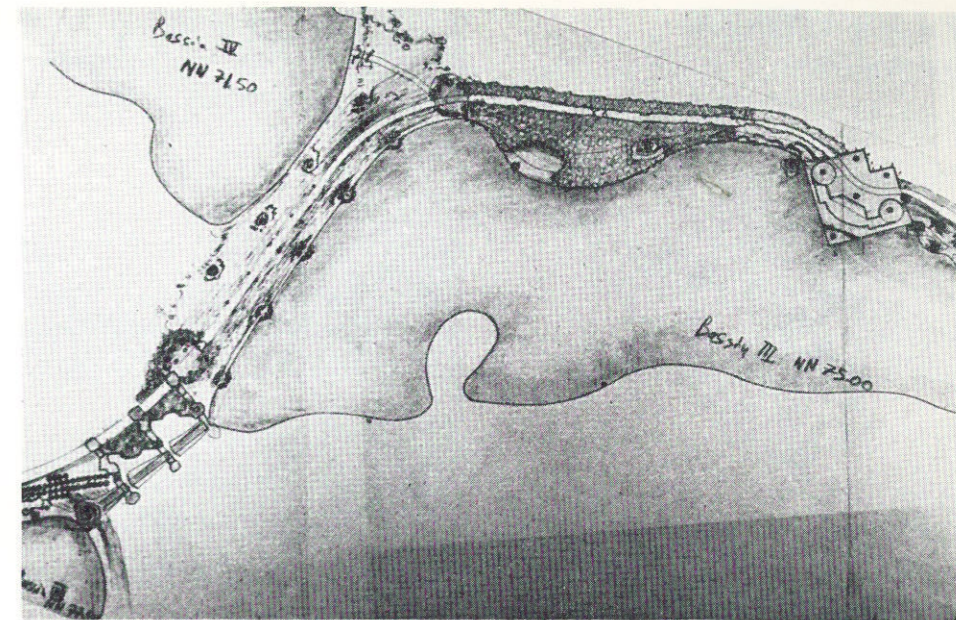
C-C断面



A-A断面

正方形広場

Place Carée



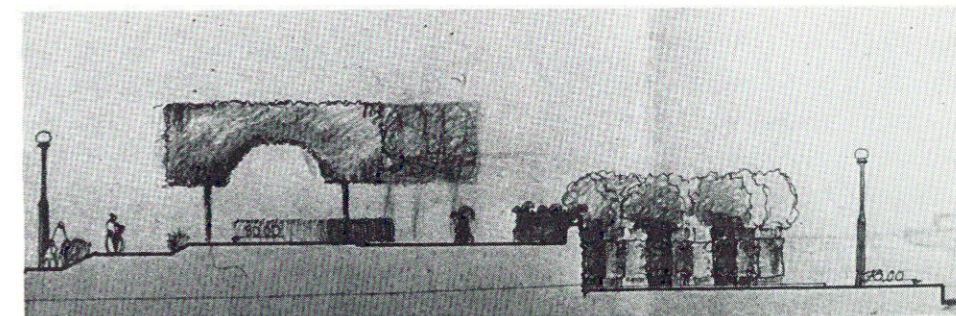
クール・ド・ヴァル・モービュエが南へ大きくまわって、ふたつの大きな池の間を通過するところに、一風変わった性格の広場が計画されている。現在、仮に正方形広場 (place carée) と名付けられているが、前述の2つの広場とは全く異なった空間構造を持っているのである。それは、つまりこの広場の正方形の重なりがルネッサンスの構成のイメージを感じなくもないが、前述のもののように歴史的、あるいは様式的レファレンスを明確に表してはいないからだ。

しかし、広場が池の中にそのひとつの隅を伸ばしている所に、そして昔この池が小川であった所に自然が、その痕跡をとどめている。つまり、広場は川の軌跡に沿って削り取られているのだ。

この自然に対する人為的介入は、明白な<やさしさ>をもって、自然というものにその歴史を書き残すことを許しているのだ。この自然の<倒置された痕

跡>はわれわれの意識に見慣れぬ共存の感覚を投げかけてくるだろう。また、この広場はそれ自体横断歩道ではなく横断車道となって、ヴァル・モービュエ並木道を大きくねじ曲げ、自動車を自然に減速させることにより、イタリアの広場に見られるように人間と自動車の共存をも可能にするよう設計されている。幾

何学的に構成されたプランは、微妙なレベル差や材質、色等の変化で視覚的に理解し得るものになるであろう。そして池のほとりを巡って走るヴァル・モービュエの並木は、さまざまな手法で池へのアプローチをはかりながら、人間の行為が、その自然への介入が、<やわらかく>繰り返されつつ連なっていくのである。



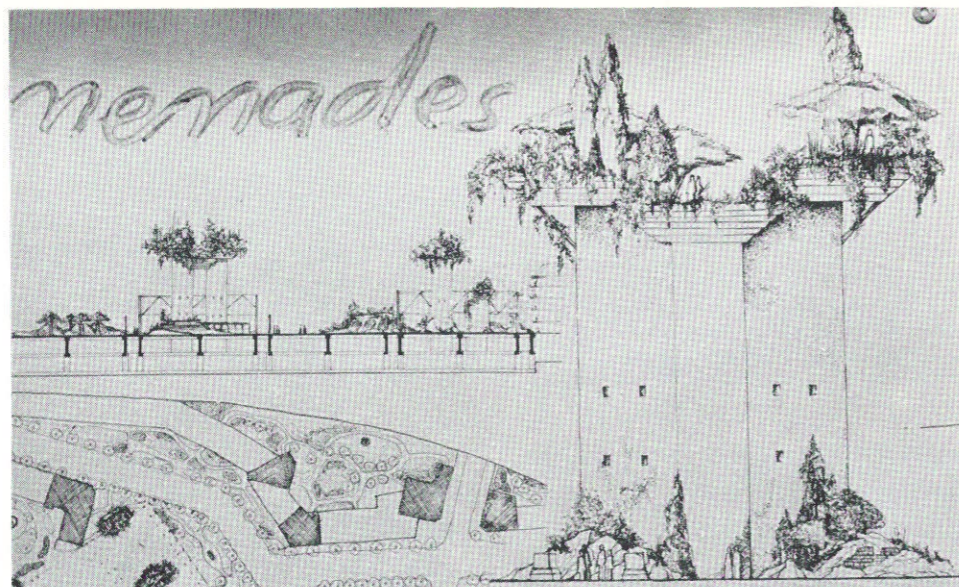
ヴィレット再開発案

Projet de la Vilette

パリ19区、ヴィレット門とバントン門にはさまれ、サンマルタン運河がセースから導かれて3つに分かれた所に位置する、ヴィレット屠殺場とその50ヘクタールにも及ぶ敷地には、立ち働く人影も見られず、むなしく広がる雑草がこの大工場を覆わんばかりになっている。

この屠殺場は、ボンポドー大統領時代、オートメーション設備を誇る超近代的施設に、鳴り物入で建て換えられたものだが、基本計画の誤りから使用不可能に陥り、今日に至るまで放置されたままで、当時一大スキャンダルを惹起した代物であった。緑地不足に悩むパリ市都市計画局は、それゆえ、この貴重な土地の再利用計画のアイデアコンペをこの6月に行なったわけである。概要は最低15ヘクタールの緑地公園、最高4,500戸の住居、オフィス50,000m²、商店、ホテル等75,000m²を含むものとされ、バントン門近くにあるバルタールの鉄骨造市場（19世紀末）は保存されることになっている。

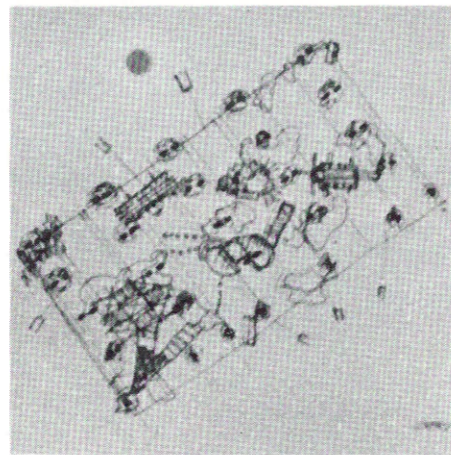
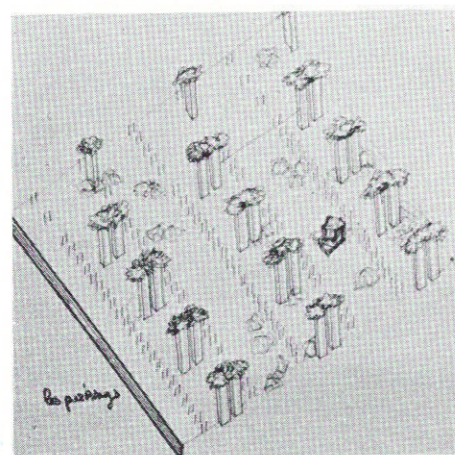
グランバックは、この長大な屠殺工場の建物から、鋼製の梁、屋根、床板等すべて撤去して、残ったコアシャフトが林立する「巨人の森」(Forêt des Géants)と名付けられた、奇妙な公園計画を提案した。一辺5m、高さ23mの巨大なコアシャフトの上部には新たに大きなテラスが取り付けられ、そこにさまざまな植樹を行なう。また、その足下には古代ローマの遺跡のように、円柱の断片や崩れたレンガ壁の一部が積もっている。それは、まさしく演出された廃墟ではあるが、近代性の象徴であるコンクリートの巨大な列柱が一挙に巨石時代の廃墟の面持を獲得して現われ、現代社会に対して強烈なアイロニーを放射している。それはまたあたかも機能主義社会の未来の基地とでもいえるか。グランバックはこの「巨人の森」を、移動スクリーン、テント、組立式客席等と組み合わせ、演劇、展示、催し物等の文化活動に利用し得る多目的の広場としている。この、地上23mの柱に持ち上げられ、空中に点在する緑の連なりは、バビロンの空中庭園の神話を現代に持ち込むような特異な都市景観を産み出すためというよりも、むしろ、この地域に与えられる歴史的な文脈のひとつの伏線と見なすべきであろう。というのも、アパート群は、近代都市計画の文脈とは明らかに異なる、19世紀パリの最も特徴的なオスマニ



巨人の森

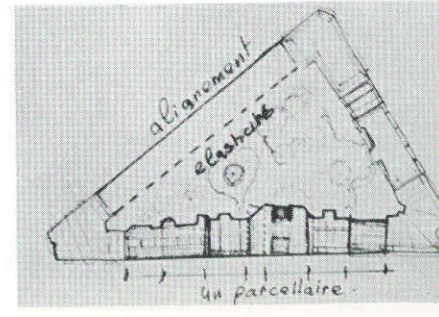
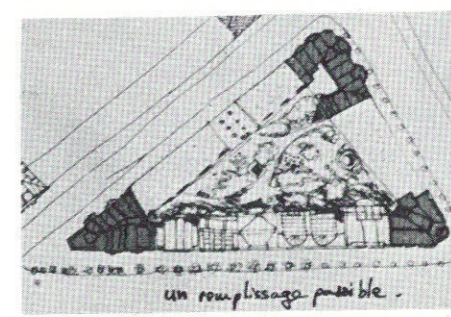
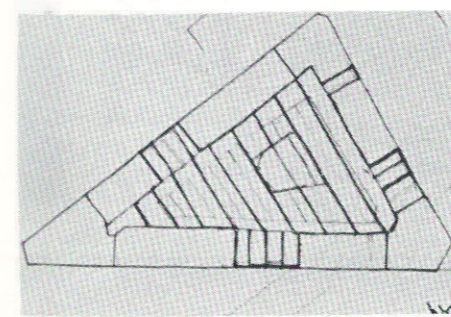
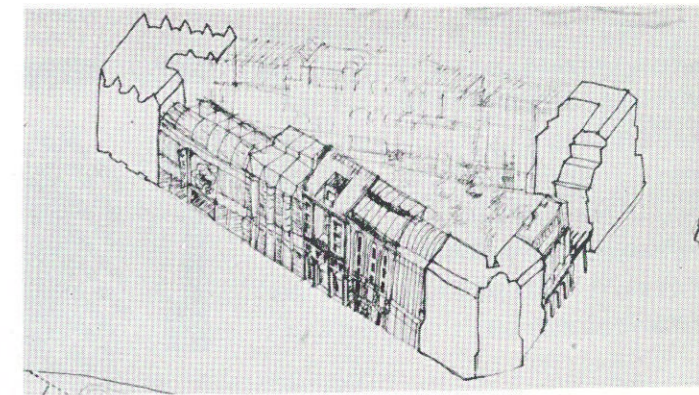
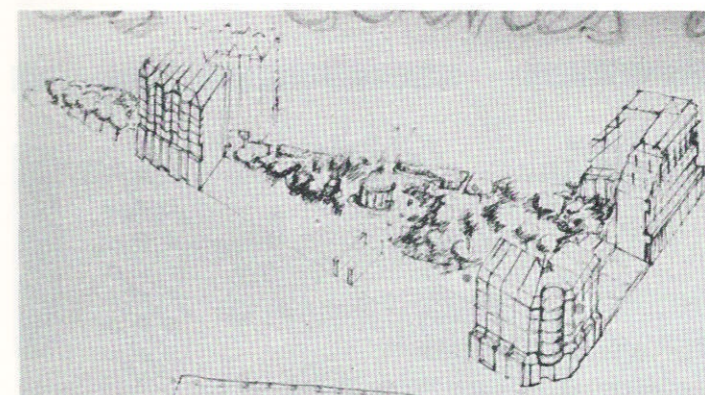


断面



アン・スタイルの街区割を意図的に持ち込み敷地一杯に拡がり近隣地区との構造的不連続を避けていること、そして、これ等の街区 (ilot) は「巨人の森」によって突然断ち切られていることから、われわれはそこに、機能主義が既存の街並の中に無理矢理入り込んだ不連続性を読み取ることができるのである。そして、この現代の廃墟「巨人の森」は、粗暴な近代論理の侵略に対する、市民の、その伝統的文化の勝利のモニュメント、戦捷碑そのものであることが理解できるからである。歴史は完全にすり換えられ、逆転されているのだ。彼にとって、都市計画とはその街の誤った歴史をより人間的なものに書き換えること、あるいはそこに新しい歴史の叙事詩を、廃墟をその例証として与える詩的作業にはかならないことが、このプロジェクトには明確に表現されているのである。また、バルタールの市場については、これも「巨人の森」同様に街区を切断しているが、その人間的スケールゆえに、全面的に保存されているような印象をさえずえられる

であろう。この街を構成する街区 (ilot) は、周囲を道にかこまれた壁面の連続した、閉じたアパート群であるが、その構成上必要な隅の部分の建物だけが最初に建設され、その外部空間の大まかな性格を規定する布石となり、その他の建物は時間をおいて、つまり、実際の都市の発展の時間的プロセスを含みながら建設され、もちろん他の建築家にまかされてもかまわないものとしている。この方法により、建続した壁面の画一性は避けられ、都市景観の一定の秩序を保ちながら、同時に多様な展開を与えることが可能になるからである。(この方法は、カストロとともに参加したPANのコンクールの時に考え出されたものである)。運河周辺に広がる浪漫的庭園は、街区の内庭にも取り込まれ、この街を19世紀の文脈の上に織り上げている。グランバックの浪漫的庭園好みは、浪漫主義の本質的指向、つまり過去へのノスタルジーをもたらすための空間として、繰り返し現われてくるのだろうか。彼自身は言葉をにがしているのだが、

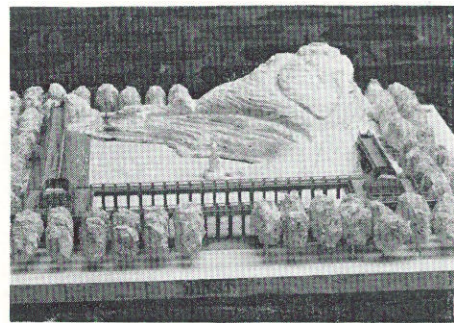


ナポレオン広場

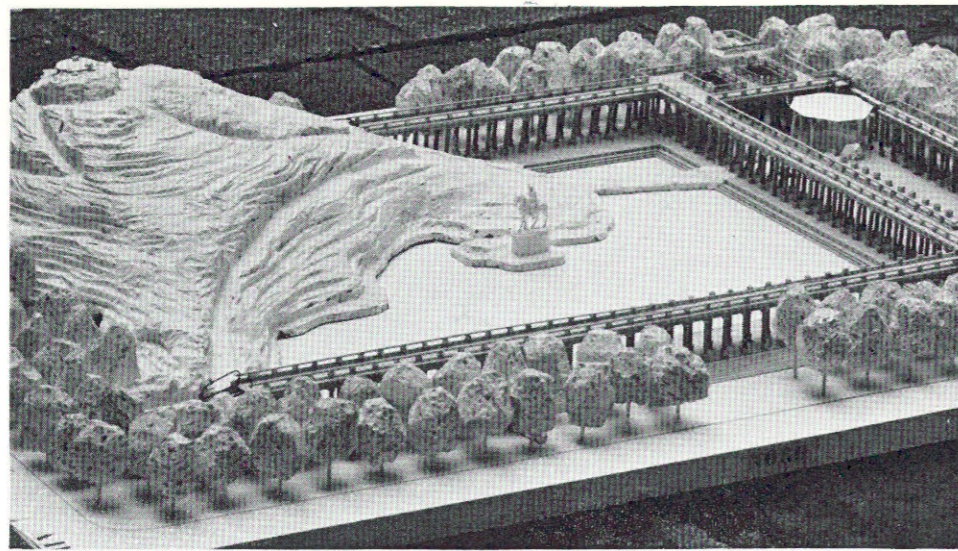
Place Napoléon à la-Roche-Sur-Yon

これは1975年に行なわれたコンクールの佳作入選案である。(この時カストロは1等)

この町の中央集権的性格、軍事的支配のシンボル、またそれ以外の何物でもない、というようなナポレオン広場をいかに改造するかに対するグランバックの返答は、この広場の歴史をより人間的なものに置き換えようとするものである。つまり、ナポレオン軍団の駐屯地であり、練兵場でもあったこの広場はナポレオン政権崩壊以後現在に至るまで、その有効な利用法を与えられず、空虚なひろがりのまま放置されていた。広場中央にはナポレオン騎馬像のみが、あたりを支配するように高くそびえているだけで、それ以外には何の空間システムも、活気も、<柔らかな構造>としての並木も無く、この町にひとつの誤った歴史として与えられているにすぎない。彼はここにナポレオン以後の歴史として、19世紀に流行した浪漫的庭園を持ち込んだ。パリのピュット・ショーモン公園を思わせるような小高い丘が、教会のファサードを隠すように築かれ、その頂上にはベルベデーレも(彼の文脈では<愛の神殿>を指すギリシア神殿風の望楼)が建てられ、小径が丘の斜面をうねりながらナポレオン像を見下ろす位置を与えている。そして広場の三方は、新古典様式の列柱廻廊がとりかこみ、見えかくれする視線によって丘の高さを和らげ、作られた自然と様式的秩序の均衡を与えようとしている。つまり、広場は軍団ではなく自然によって埋められ、さらに古典的秩序によって色付けされるわけである。この全く違った19世紀的庭園のふたつの典型の複合によって、この町のとぎれていた歴史は回復され、自然と人工の複合が都市の中心を形成する核として生み出されることを



ナポレオン広場

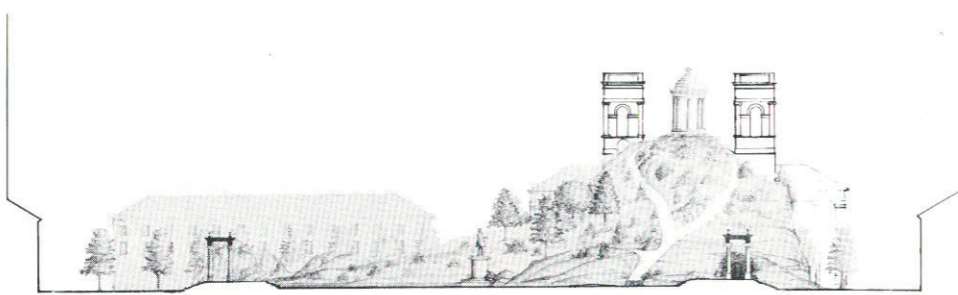


目論んでいる。

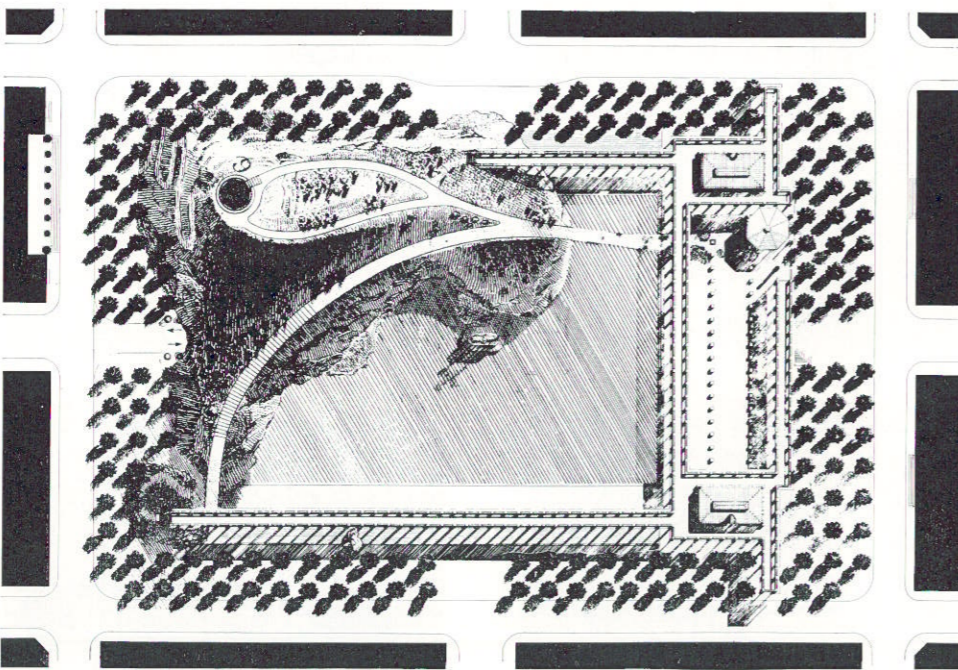
広場を取りまく建物の無性格な壁面の連なりは、列柱と並木によって新しい秩序を与えられ、そこに楽しさを生み出すことになろう。

そして、愛の神殿(Temple d'amour)はナポレオン像にとってかわってこの広場を支配することになり、その高さが教会の鐘塔よりもいくらか高いことはその

優位を表わすものであろうか。この広場の内部、丘のふもとには水が張られ、大きな池と化してさらに都市の中心としての隠された意味を与えられている。古代ローマ皇帝の宮殿に見られるようなこの列柱に囲まれた池は、年に数回水を抜かれ、祭典にも使われるという。それはローマのナヴォナ広場とちょうど逆の使われ方であることをわれわれは気付くであろう。



VERS L'EST



ラ・ロッシュ・シェル・ヨン ナポレオン広場計画案

建築 そして記憶が 明らかに必要であるということ

アントワヌ・グランバック

<ムネモスネ神話に対する、クロノス神話の展開は、時間の表象に触れながら、困難と不安の時代に関わっているように思われる>とジャン・ピエール・ヴェルナン*1は<ギリシャ人の神話と思考>(Mythe et pensée chez Les Grecs)で記している。

ムネモスネの女神は記憶の化身である。この女神は9人のミューズの母であり、詩の分野を司り、<不可視のもの謎解き、いわば超自然を表わす地理学として>歴史を詠唱する。クロノス、それは時の化身であり、宇宙の根源に置かれる年ふることのない時間、すなわち不朽の時間なのだ。紀元前7世紀になって新たな人間像が生まれると、過去、現在、未来の一切を唱うことによってその全てを許し包容するムネモスネの智慧に対して、この新たに生まれた人間の不安は、クロノスに重要性を与えることになる。世界と知識のすぐれて詩的な性格の認識におけるこの転位、この断層*2は、19世紀建築の思考が健忘症に侵された挙句に行なったあの邪悪な運動にほぼ対応する。つまり、それは脱歴史のもしくは反歴史のあらんとする思い上がりであったということを中心したい。

建築における古典主義的構成についての疑問、すなわち修辞法の危機が写し出された建築は、キュービズムの画家たち、そしてそれ以前のマラルメの詩学が端緒となった*3空間と時間の新たな関係の中に自らの正当性を見出す。だが奇妙なことに近代建築は、フロイトがウィーンに引き起こすことになったさまざまな動乱*4には無関心であったために、記憶を方法化するための防衛線を張って粛正されたものの、結果としては、アテネ憲章に由来する計画案の中に、過去の邪悪な運動が破廉恥にも現われることが運命づけられるようになるのだ。

時間の思考は、今日、科学的たらんとの見せかけの方法となり果て、<デザイン>において、柔軟性、成長、開かれた建築、さらには工業化として名乗りあげているのだが、その極まるころは、計画的廃棄にほかならないのである。われわれの住む現代において、こうしてクロノスがムネモスネに新たに復讐を遂げることは、今や危機の瀬戸際に達していることを示している。だが思考に対する技術の、かくも高飛車に出、無理を強いる状況の中で、時間というものから解き放つ手段としてのムネモスネの回帰せんとする徴候が認められる。つまり、時間を存在理由として勿体をつけていた研究はいずれも、その結果として、われわれから時間を奪い去ってしまっていたことに気が付いたからだ。痕跡を残さないという欲求、いわば、未来に関わることを拒むことから成立するこのデマゴギーは、今日、現存するものを、現在のものとしてすませようとする耐え難い状況の中で、特権的な手段として登場しているが、しかし、現在とは過ぎゆくものである故に、われわれはこのような状況の中では<現存在>たりえないのである。

このムネモスネとクロノスの対立を視野に入れつつ、私は、ここに永続なる概念が、建築の歴史、理論、実践の絡み合いを通してわれわれに及ぼした影響を押し出してみたい。

永続の概念とは、つまり、道、田畑、水、あるいは季節にみられる歴史のように半ば不変の、遅々とした歴史を抜き出さんとし、フェルナン・ブローデル*5が唱えたものである。建築とは、このような迷宮の中に根を下ろし、われわれに、時間と記憶をそこに宿す形象について再考せしむるものなのである。

*1 Jean-Pierre Vernant 歴史心理学者。古代ギリシャ社会の研究において神話の構造性の中に新しい地平を見出す。他に<ギリシャ思想の起源>、<古代ギリシャにおける神話と社会>等

*2 転位、断層 紀元前7世紀ごろギリシャ芸術において、クレタ、ミノス文明の東方的な叙述的、描写的性格から脱却するギリシャ独自の構築的、理性的な表現方法が確立され、それによってひとつの価値転換、文明の断層が生じた。

*3 Stéphane Mallarmé(1842-1898) フランス象徴派の詩人。彼の詩はいわゆる感情の吐露ではなく、音と意味の複雑に絡み合った美的構造物であり、この手法は他の芸術分野にもその近代運動の発端としての影響を与えることになった。

*4 フロイトの動乱 フロイトの精神分析学が人間の深層構造を明らかにしたことがひとつの契機となって、さまざまな分野に伝統からの分離運動を引き起こすことになった。

*5 Fernand Braudel 国立歴史研究所所長、アカデミー会員。<フィリップⅡ世時代の地中海と地中海世界>等の著書がある。

※6 Leon Battista Alberti (1404-1472) 建築家、人文学者、絵画、音楽、詩にもすぐれたルネッサンス的人間の典型。ヴィットルヴィウスの建築論を再評価し、完璧な調和を理想とする彼自身の<建築十書>を書き上げたルネッサンス建築の理論的先駆者。

パッツォ・ルチェライ(フィレンツェ)、サン・フランチェスコ教会(リミニ)等の作品がある。

※7 人体の表現 現実の人間を世界の尺度とするギリシャ精神の根底をなすものであり、構築性と感性的な美との調和をはかろうとする規範的な形象、またその精神の象徴でもある。

※8 グランブールパール シャルル5世時代(12世紀後半)のバリ北方の市壁を1670~1705年にかけて取り壊し、その跡地は広い並木道になり、当時は歓楽街として栄えた。後にファサードの統一された都市性の新しい表現を生み出すこの並木道は現在も商業地区として活況を呈している。

※9 亀裂 18世紀末から19世紀後半にかけて、グランブールパール周辺の商業地域は既存街区の内部を貫通する小路(Passage couvert)の建設によってショーウィンドウの長さを増大させた。その結果、この小路は都市組織に対する一つの亀裂として現われる。

※10 Walter Benjamin (1892-1940) 文学者、批評家、大衆芸術、マスコミ論等の領域で斬新な見解を発表。ナチスに追われビレネー山中で憤死。

※11 円積法 円と等積の正方形を作ること、作図不能文題、また不可能を試みること、完璧な調和をめざすことの隠喩であろうか。

註1 Architectural principles of the age of humanism. London, AiccTiranti, 1967.

註2 L'histoire de la théorie des proportions humaines conçue comme un miroir de l'histoire des styles, 1961. L'œuvre d'art et ses significations, Gallimard, 1969.

註3 Paris, capitale du 19ème siècle, 1935年5月, 初版1955年, Poésie et Revelation 抜粋 Denoël 1971.

1 時間の形象

建築史における近代性を批判する作業に携わって来ると、相互変換可能な瞬間の連続と考えられる時間によって、<何でも可能>とか、いわゆる開かれた工業化のイデオロギーはやみくもに支えられているといえる。

しかし、私としては、ここに<倒置の考古学>(archéologie inverse)と名付けた設計方法論を組み上げたい。ニュータウンに関してみると、近代性や技術に対する批判は、ニュータウンに先行する想像力の都市の痕跡として構想される公共空間を実現することによって果たされる。

かつて建物の描いていた形象

が失うもの

廃墟がその残影としての建物

から得るもの

この喪失と獲得とが、あるいは、

建築を生み出すのか

2 記憶の形式・亀裂

——隠れた表象・精神分裂的な体——

昨日、私が夢に遊んだのは、ただか昨日のことだったのか。つまり、昨日、果敢にも名状しがたいものに立ち向かった私は、人体について思考をめぐらせるうちに(何と無邪気な冒険だろうか)、アルベルティ※6と人体の表現※7を追跡して、ルネッサンスの迷路のなかで渾沌に落ち込んだのだ。

ウィットコヴァー註1、パノフスキー註2に導かれていくうちに、人体の現代的表現ならびにその建築的あるい

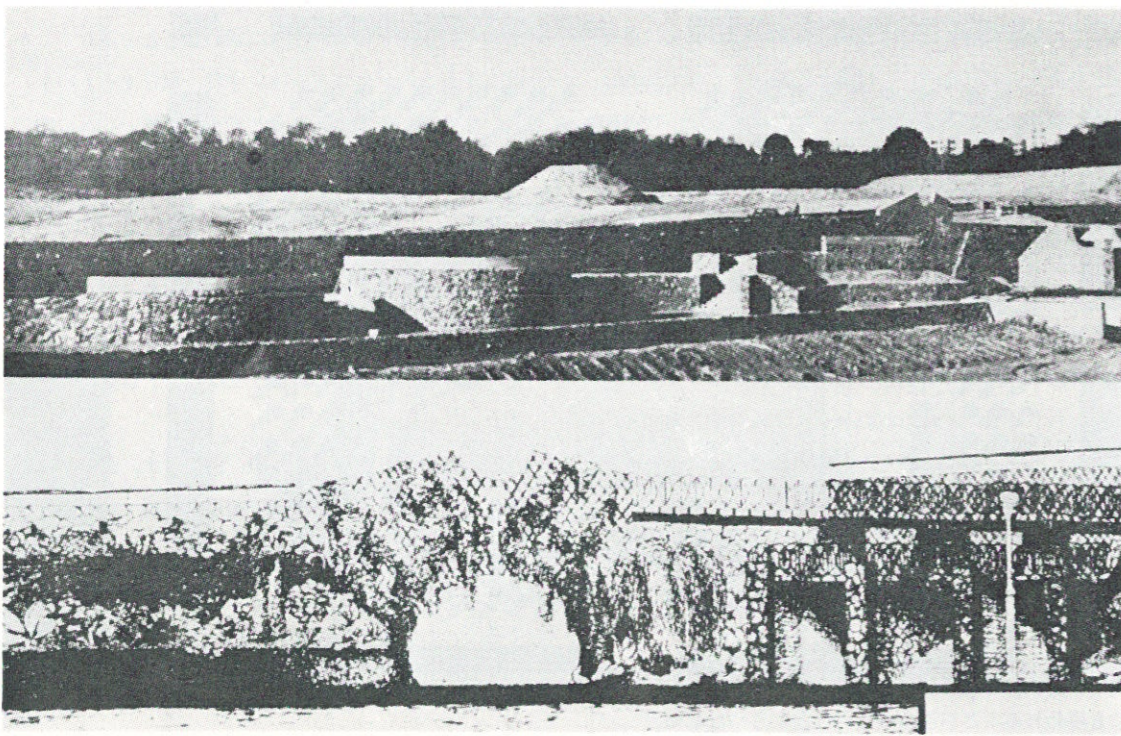


図1(上) マルヌ・ラ・ヴァレ貯水池の堤の公園 珪石の壁、石灰質の敷石、オリエントブルーのタイルが、この土地に、時間の愛撫を受け入れ、このニュータウンに先行してそこに在った街の痕跡として与えられることを要請する。(現在建設中)
(下) 堤のデッサン
この堤が実現し植物に覆われた時に見出す本当らしさを示している。

は構築的対応の性格についての、ある深くかつ有益な不安が私を襲った。その熱っぽい夢想に間断なく現われる数々のイメージを私は経巡りながら、やがて頹廃をさそう、しかし同時に安堵に満ちた一条の光線に、グランブールパール※8の街並みを突き抜ける長い亀裂※9から落ちてくる夕べの光に、たどり着いた。そこはすなわち、アーケードのガラスのヴォールト、いわば奢侈な想像力にあふれ、高いが演じられる場所なのだ。

このガラスのアーケードと人体表現との観念連合は一体何であったのだろうか。何故に私はこの亀裂の中に浸り、断絶の観念、つまり分け隔てられた生活の観念にとりつかれてはじけ飛んでしまったのか。19世紀建築の原形たる亀裂、すなわちガラスのアーケードは、疎外された人間についての歪められた碑文として、同時にその行き過ぎの状態として登場しているのであろうか。

ワルター・ベンヤミン※10の、バリとガラスのアーケードについての記述註3、ユートピア願望と切り離せない工業資本主義の産物(ガラスと鋼)についての造詣深い表現が、その時密かにもうひとつの扉を開きかけた。

見慣れぬ扉、わずかに形をとり始めたある思考にかかわる形象を呼び起こすその扉が輪郭を現わしたのだ。それは円積法※11、すなわち調和のカノン(Quadrature de cercle)にとって代わった見慣れぬ手法、つまり正方形の対角線あるいは亀裂、否むしろ象徴的な傷跡としての、消点のないパースペクティブの無限のたわむれへの誘いなのである。書物の中の如き誇張ではあろうが、そこには私が真実の概念に近づいているという感覚があったのだ。

私はこの真実への全ての嫌悪について言及するつもりはないが、かつて覚えたことのない確かさをその書物の紙片に感じ、このただならぬ発見に身を焼かれんばかり

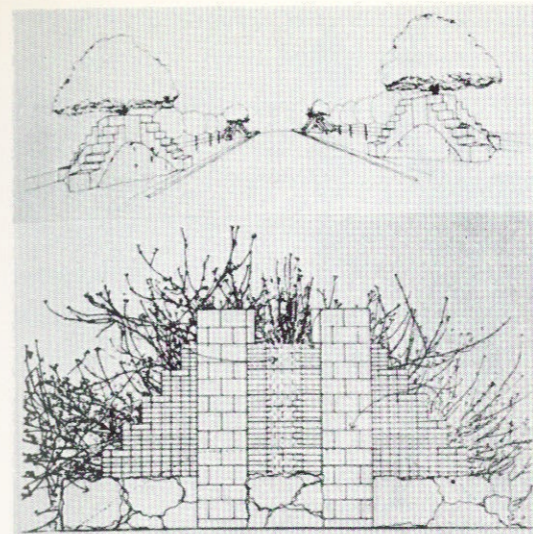


図2 テムリテムリの並木 連続する巨石の思い出、モニュメンタルな配列は、この土地に先立つ歴史の跡を描きながら、この道はトルシーの集落と新しい都市センターを連結する。これらの家(テムリユス)の群は果樹を載せ、新しい都市化の中心で、季節についての記憶を作る助けとなるだろう。



図4 ジョフロワ小路内部 これらの小路は、フーリエ(1772-1837. 社会学者、哲学者)のいう<調和の宮殿>の最も大切な魅力である<ギャラリーの道>に対応するものである。現存街区と重なり合い、家々のかたまりをぬい込み、ガラスと鋼のおおいによって採光されているこれら無数の通路は、まさに、19世紀のバリの都市組織に現われる亀裂である。



図5 人体のイメージを示す形象 (上)ルネッサンス、(下)現在

であった。そしてこの紙片に描かれた亀裂のイメージは、そのテーマに基づいている一連の建築作品群を私に思い浮かべさせた。それはまず、ル・コルビュジェと彼のハーバード大学視覚芸術センターに関することにあり、次いで、ルイス・カーンの諸々の計画案と彼の訓戒との上にかがみ込み、それからポーブル計画※12をとりまとめた雑誌を、さらにカストロ、デュバル、マジジョ等のブチト・ロケット設計※13 競技案を眼の前にすれば、そこに絶えず現われる亀裂のテーマは、これがひとつの真実であることを表わしているのだ。この歓喜の中で、私は亀裂のテーマをとりまく空間と人体との現代的整合と、建築設計における対角線の意味するものについてひとつの解答に到達したと感じたのだ。建築家から建築家へ、計画から計画へと私の観察が今や次第に真実味をおび、それによっておのずから明瞭さは広がり、断絶、亀裂の深淵の上に私自身の建築を建てることにも似た、全体性の感覚に基づく欲びが満ちあふれてきた。やがて、いわゆる合理性の名のもとに建ち上がった建築を忌憚なく論破しうる位置に達した私は、この亀裂のテーマと精神分裂に関するラカン※14やドゥルーズ※15の哲学的研究との関連に着想したとたん、不条理のめまいにおそわれることになった。ここに<取り壊されることを予定された>建築は、一挙にその哲学的根拠を見出したのだ。その時、亀裂の建築的アナロジーをそこで思い留まらせるひとつの先行すべき計画が浮かんできた。つまり、マルセル・デュシャンやフランシス・ベーコンによってすでに描かれた、はじけとび、切り離され、分割された人体の表象を集め、それらと近代建築の隠れた形象との対応関係を見出すことが中心的課題であることに私は気が付いたのだ。

これらの表象は実在する。おそらくその間に関連性を見つけることは無駄であるかもしれないが、しかしひとつの明証性におそわれることは避け得ないことなのである。すなわち、ルネッサンスにおいて、宇宙の中心としての人体表現、つまり<円積法>—調和のカノン—は、建築の規範的図式(集中式プラン)の形式に対応していたという、パノフスキーが示したあの明証性なのである。このように亀裂のテーマの建築における出現は、今日誰もがわかち合う人体表象と関連している。この問題提起は、そこに、人体という空間以外に空間はないということが真実であることを認めるものなのである。

3 倒置の考古学

過去と現在の間でかろうじて踏みとどまっているこの建築家という軽曲師、彼は綱が十分に張られているかどうかを確かめた後でしか、冒険を行なおうとはしない。つまり、計画が十分に整理されているのを確かめて、そ

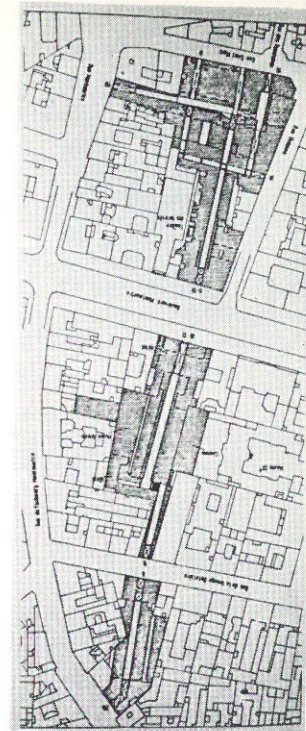


図3 パノラマ小路、ジョフロワ小路、ヴェルドー小路、パリ

※12 ポーブル計画 バリの歴史の中心といべきマレー、レアール両地区にはさまれた位置にありながらも放置されていた旧ポーブル街区に、1968年、パリ市はこの地域に不足していた教育文化施設建設を計画した。1969年になって、ポーブルの都市計画的な重要性や建設規模の拡大の要求等から、当時の大統領ボンビドーが介入し、国立現代芸術センター計画として再発足し、1970年、大々的な国際コンペを催すに至った。その結果、ピアノ、ロジャースの伊英コンビ案が選出され実施に移された。本年末竣工の予定。

※13 Petite Roquette 1974年、パリ11区にあるブティット・ロケット刑務所の移転計画に伴い、跡地利用計画のコントロールが行なわれた。この時、カストロ等 GAU グループの設計案は大きな反響を呼んだ。

※14 Jacques Lacan 1901年パリ生れ。精神分析学者。著者に<人格との関係における偏執狂>がある。

※15 Gilles Deleuze 精神分析学者。著者に<ザッヒャー・マゾッホの紹介>

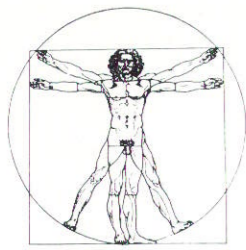


図6 比例の規範, レオナルド・ダ・ヴィンチ, ヴェネツィア, アカデミア 人体の表象とルネッサンス建築における中心の主題との一致, すなわち, 正方形プランの上の丸屋根

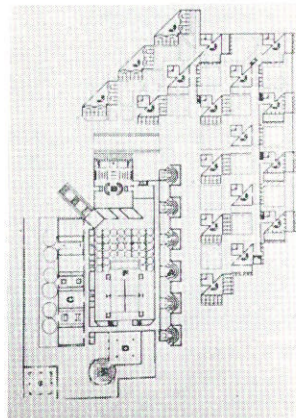


図9 インド経済研究所, アメダバッド, ルイス・カーン (1963) <もし, 全くの正方形パターンの中に広場を置くことすれば, その内の2辺のオリエンテーションは好ましくないことになる。そこでこれを対角線上とすれば, 風変わりな状況を作ることになるが, この問題に答えることができ, また, この幾何学的プランを征服することにもなるだろう。> Remarks から, Perspecta 9/10.

註4 Port Grimau スポエリ (Sporri) 設計によるサントロベ近郊の広大な住居群とそのヨット用施設はイタリアの集落を模倣して建設された。

註5 Team X, 1953年, アクス・アン・プロヴァンスでのCIAM総会で, 当時アテネ憲章起草者たちがおちっていたアカデミズムに反抗して10人の若手建築家が創ったグループ。

*16 Unité d'habitation このユニテ・ダビタシオンが自然から, あるいは過去に造られ今や半ば自然のような都市環境から浮かび上がること, つまり遊離することを意味している。

図7 モデュロール, ル・コルビュジエ建設分野における, より望ましいスケールを与えるための調和基準, 黄金比を基礎にこの比例は一辺の対角線上への回転によって得られる。

図8 視覚芸術センター, ハーバード大学, ル・コルビュジエ (1964) このセンターは, ネオ・クラシックの建築群が作り出すキャンパスの中央に刻み込まれている。ル・コルビュジエはこれを, 道路網と建造物によって決定されているシステムを対角線上に通過する通路のように設置した。

図12 ユニテ・ダビタシオン ル・コルビュジエ (1945)

れを実現に移すわけだ。恐らくわれわれにとって都市の体験とは, 軽曲師にも似て, 綱が絶対に張りすぎないようにするとともに, アンカーや基礎に不用な力がかかることを避けるための適度なたわみを残すことを促すものなのだ。この軽曲師についての記憶は, たとえ今日いくつかの計画が表わしていることの隠喩にしかすぎないとしても, 彼らの先達とは反対に, 新しい形態の要求に抗して厳しい自制を課していることが少なくとも存在することを証明しているからだ。そこでは, 一群の引用, 独創的コラージュをあみだす構造的シェーマ, 数多くの明快なレフェランスによる作品, などの演出をもって構成規則とされているのである。とにかく, ポール・グリモー註4, ディズニールランドといった計画案は随処で実際の街に堆積している手法を用い, 見せかけの快適さを表現しようと精一杯の物真似をしている。以上のことから, ここ25年間, 街の骨格を破壊しながら, その必要性ゆえに, 大急ぎで建設された健忘症的都市について, われわれは疑問を持つのである。

健忘症, 忘却, このギリシャ人にとっての死の水は, めまいをおこさせるようなあの空虚をまさしく表わしているものであろう。そして, このめまいも, 醒めた人ならば不死ともいうべき記憶をよりどころにひたすら抗うことができるにちがいないのだが。

ところで全ての近代建築運動支持者たちは, 建築群と社会問題とを性急に同一視せんとし, 彼らの古い街に沈積しているあらゆる相を取り去り, 古い都市の範型を新しい都市形態に変換することを信条としていた。ル・コルビュジエにとっての理想は, 自然の上にあるいはその中に浮かぶユニテ・ダビタシオン*16に, つまり不可欠な清潔さを詩的次元としての口実にするような住むための機械として表わされている。この時, 彼らが材料力学の科学的アプローチに過度の信頼を置き, 綱を極限まで引っ張ろうとしたおかげで, この綱はぶつり切れてしまったのだ。チームX註5のおこしたアテネ憲章に対する健全な反発は, 都市の連続性とその支え, すなわち街路, の必要性を確立することをひたすら追求することを主眼とした。しかしこの都市の連続性なるものも, よしんば古い都市の組織内部で, もはや起源の知れぬ街の性格に首尾よく置き換わったとしても, 既存市街地の境界においてまさに両者が接する時, そこに連続性を確保しようとするならば, やはり疑わしいものとなるのである。それ自身集落的形態として構成されたトゥールーズ・ル・ミライユ等の計画においては, この都市の連続性の研究は, 都市の不変性を提起するためには称讃すべきものではあったが, 連続性の概念とその物的構成との複合が文字の上で行なわれたほどには, 詩情の次元, つまり記憶を保証するものにはなっていないのだ。キャンディリス, ジョジック, ウッツたちは, ベルリン

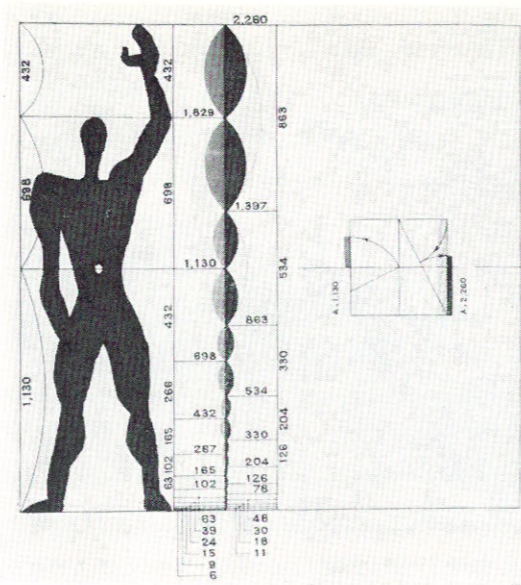


図7

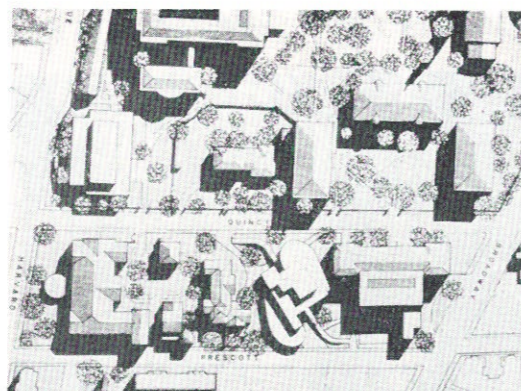


図8

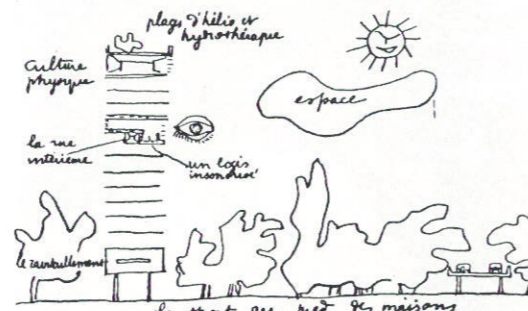


図12

大学の計画で都市の連続性の研究に新しい返答をもたらすことを試みた。建物の形態とその展開から解放された街路システムを確保しようとするこの試みは, 以前の計画から求められていた問題, つまり, 連続性の理論を部分的に解決してはいるが, その全体像はやはり街としての表情を失っている。都市の連続性を解決せんと励む最近の研究をみると, そこにはもはや何の法則性も限界もなく, 公共空間と私的空間との整合に関する以前からの研究一切を見失って徒らに膨れ上がっているにしかすぎない。しかも建築家たちは自分自身のピラミッド*17 (実はその腹腔からは自動車はき出されるのだが) を, 自分の階段で昇ることに浮かれ興じている有様で, もはや見せかけの連続性しか残ってはいないのだ。神聖なるものなるといいたい平板化であろうか。

かくの如く, 過去と未来を結ぶ綱に向き合って, この綱を, いつ張り裂けるかもしれない科学によって, あまりに強く張りすぎたために, あるいは飛び越えるべき淵の存することを忘れていたために, 綱は全くたるんでしまい, 使用不能に陥り, もはや誰一人この過去と未来を結ぶ綱渡りの冒険に立ち向かうとするものはいない。

しかし, これらの事情にもかかわらず, 新大陸からはルイス・カーン, ベンチャーリ註6らの建築と論述が, アルプスを越えイタリアからはグレゴッティ註7, ロッシ註8らの諸作品が, 綱を再び引っ張ろうとの熱意に燃える新しい息吹きのように訪れた。彼らの詩的探究は, 形態によってしかその論理を築こうとはしない。すなわち, 言葉による注釈では本質をかすめることしかできないために, それゆえに, 彼らは寡黙であらんとしていることを理解されたい*18。つまり, デッサンの中に, 眼差しは, 消し跡, 挿面あるいはその他の線によって, それらの表象による表現を, いわば想像力の現実への出現を見出すからだ。この雑然とした堆積と集積の中で, ひとつの方向が開示される。そして, もしも近代建築の指示するものに基づく空間が, 分離され, 砕け, 分裂症に陥った人体表象に対応していたのならば, これら一連の反省運動の中で, 亀裂についての別の解釈を引き出すことができよう。都市を構成するにあたって, 記憶の形式とは, この亀裂による形象の上に時間を刻み込もうとする試みの中に存するのではなかろうか。

ここに2つの例, 1974年7月マルヌ・ラ・ヴァレのヴァル・モービュエ地区設計競技のための計画案で扱った, ユーバリノス・コーナーとバルティシオンIIIを取り上げてみよう。この2つの計画案には, 予備的研究の段階で検討された住居群の構成秩序に関して, 同一の態度が見受けられる。この1単位1500戸の構成は, 古典主義的構成法との断絶, あるいは都市の体系的連続性の脈絡との断絶についての同種の危惧を明示していた。すなわち, この2つの計画案は, そこで扱った都市組織の内

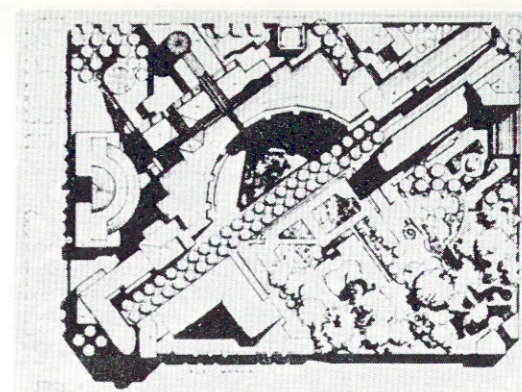


図10 プティット・ロケット跡地再利用計画, カストロ, ドリス, デュヴァル, マージュ設計, バリ (1974) この計画は亀裂を建築構成の図式として設計されている。

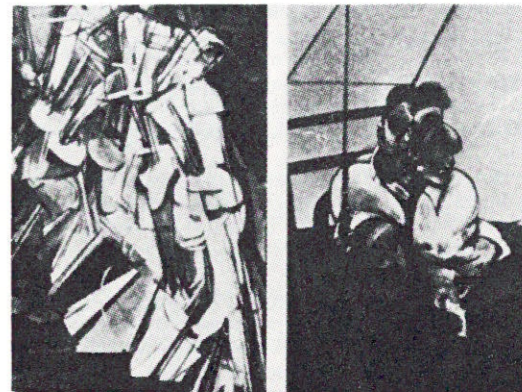


図11(左) 階段を下る裸婦 マルセル・デュシャン (1912) (右) ルシアン・フロイトのためのエチュード フランシス・ベーコン (1969)

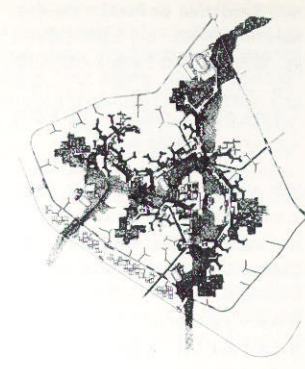
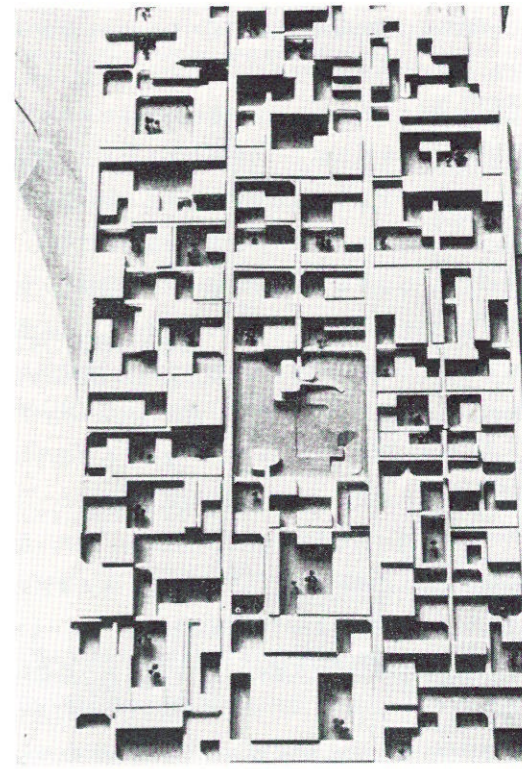


図13 トゥールーズ・ル・ミライユ計画 キャンディリス, ジョジック, ウッツ, (1961) 線的な都市センターは公共地域と私的空間とを分節する。そして歩行者のための街路は, やはり線的な緑地帯とともに設けられる。

*17 ピラミッド 現在流行しているピラミッド状集合住宅のことを指す

*18 註釈 (commentaire) と, 何故に黙るのか (comment taire) を引掛けた言葉の遊び。

註6 Robert Venturi, Complexity and Contradiction in architecture. Museum of Modern Art, New York, 1966.

註7 Victor Gregotti, イタリアでの作品多数, A.A. 誌参照。

註8 Aldo Rossi, L'architettura della città. Marsilio Editori, Padova, 1966.

図14 ベルリン大学 キャンディリス, ジョジック, ウッツ (1963) (上) 個人やグループが望ましい関係を持ちうる最小限の構成システムを用いる試み。ベルリン大学, 断面 (下) 低層建築の連続性はヒューマン・スケールを再興することを旨む。

※19 Sebastien Le Prestre de Vauban(1633—1707) ルイXIV世当時の元帥。築城長官に任命され数々の都市防壁（リール、ダンケルク、フィリップスブルール等）を設計したが、後に王政を批判したために王の信任を失う。

※20 19世紀の一断面 ナポレオンI世以来、稠密だったパリの街は軍事的、あるいは経済的な目的による幾度かの美化計画によって今日の姿を現わすことになった。狭いごみごみした道はシャンゼリゼやオペラ通り等の広く見わたる大通りに置き換えられ、その結果、これら的大通りの背後には、しばしば以前の街並みの切除された断面が現われる。

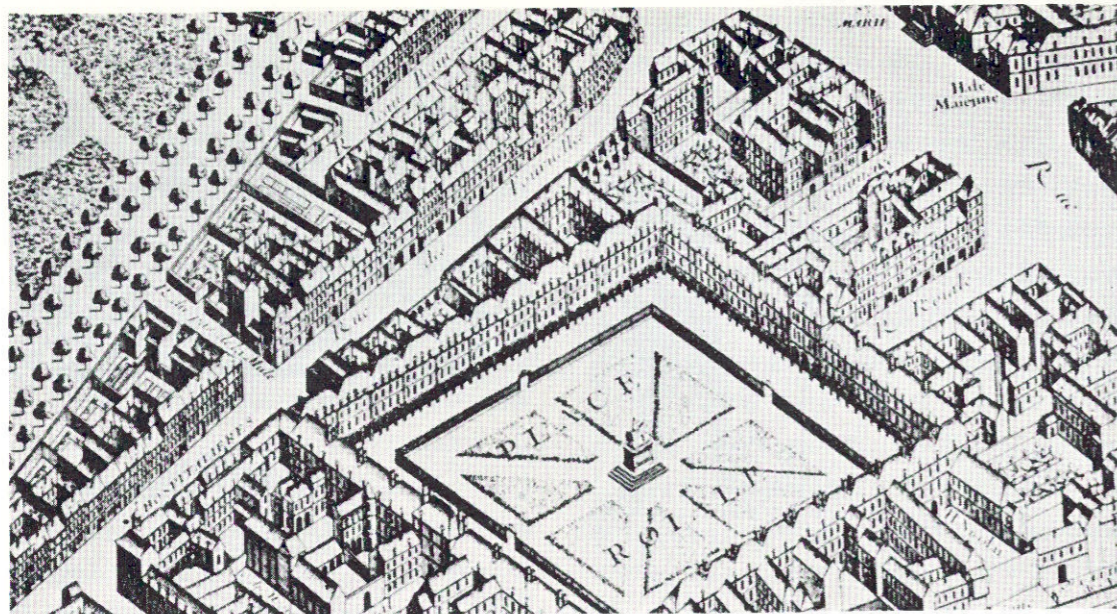


図17 国王広場と植樹された大通り チュルゴの地図から、パリ (1739)

部に、意図的な切断断面を内包しているのである。三角形の余剰空間を有効に使うべく配置された建築群を2つに扱うことによって、そこに2元性を刻み込み、この余剰空間、つまり、いろいろな集合施設を集め、ガラスのアーケードで人為的に埋められた亀裂はこのユーパリノス・コーナーをそれぞれ自身で完結させる。そしてここにシンメトリー、軸線、直角、基準面、パースペクティブ、モニュメント等といった構成要素を再配分することによって、ユーパリノス・コーナーはそれ自身を古典主義的構成法への批判とすることになる。相異なる2つの都市組織が相互貫入することによって生ずる対立効果によって、バルティシオンIIIは体系的組織の問題を提起し、2つの都市成立期に分け隔てる断層のなかに古い街が示している諸々の出来事を呼び起こそうとしている。

前者は切断された形象、後者が多様な全体システムという説明では、それらが2つの相異なるものとして登場するには不十分であり、欲張りすぎであると私には思われる。というのも、これらの計画の目論むところは、記憶の欠如、つまり新しい都市形成における詩情の欠如に対する批判を明示することだからである。この記憶にあえてひとつの形式を与えようとする試みに加えて、亀裂は、私が倒置の考古学と呼び、都市の哲学へ向かわしめる手段の一部をも為している。なぜならば都市は、城壁、切開かれた道路、国王広場の設置等の歴史の上に建っており、常にある本質的残滓、すなわち、それら建造物群の堆積した相を示しているからだ。ルイXIV世治下でのフランス統一によって、王国国境はヴォーバン※19の設計した城塞都市に置き換わったために、パリ市壁は破壊され、グランブールバルとして相変わらず現存する亀裂を刻印することになった。同様に、オースマンの切り開いた道路は、物見高い見物人に、切妻や袋小路、尖った街角といった19世紀の一断面※20を投げかけ、そ

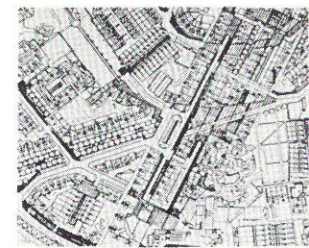


図15 バルティシオンIII (Partition III) モービエ丘陵整備計画設計競技、マルヌ・ラ・ヴァレ、1500戸のための住居プラン (1974)

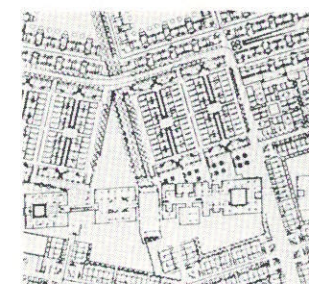


図16 ユーパリノスコーナー (Eupalinos Corner) モービエ丘陵整備計画設計競技、マルヌ・ラ・ヴァレ、1500戸のための住居プラン (1974)

THE NEW WIND IN THE BEAUX-ARTS

Riichi Miyake

1. The new direction in the Ecole des Beaux-Arts

After the reformation of 1968 at the Ecole des Beaux-Arts, one could hear a certain voice of anxiety. But it seems to be off the point when we see the new trend of the younger generation, whom we would like to introduce on this occasion.

It is true that French architecture lost its initiative in the international field of architectural culture for the past twenty years. Although one can ascribe it to many reasons, the concentration of architectural education which interrupted a free efflorescence of creative ideas is certainly responsible for it.

However, the younger generation represented by such architects as Roland Castro or Antoine Grumbach seems to recover the vivid inspiration, getting over the obsession of modernism. They don't follow the ethnological principles expressed by Team X or the Metabolists, while they dare to apply the "completed" context of urban architecture.

This attitude corresponds to a phenomenon of great re-examination which has taken place in France after 1970. They examine the whole repertoire of architectural history this country is endowed with, so that they may come to discuss about the problems of classical composition and theory.

2. The revival of historicism ?

It goes without saying that the Ecole des Beaux-Arts was, a long time ago, the stronghold of historical architecture, and yet it is also true that this school played an important role in shaping the new trend of modern architecture as Reyner Banham pointed out.

The architects of the last century finally found a method of eclecticism to resolve the confusion of classical principles, while the crisis which we have long felt after the eloquent period of modern architecture also brought about an eclectic aspect today. It is the Ecole des Beaux-Arts that, more than a hundred years ago, reorganized the classical discipline so as to create a high-levelled technique of refinement called eclecticism.

Today's "revolutionary" architects like Castro (GAU) or Grumbach surely represent this way of composition, going so far as to discover anew the original forms of Palladio.

It may be a dangerous bet to return to historical architecture, and it seems preferable not to limit oneself to clamouring for trite and banal styles of modernism.

3. The new mode of public consciousness

The question of historical architecture leads us, from another point of view, to the problem of public urban spaces composed throughout a long tide of history. The urban organization of Paris is typical of it.

The public consciousness as well as the public spaces like plazas and squares were conspicuously formed at the age of the Enlightenment. It is worth noting that such spaces have accumulated throughout many centuries so that they now have a certain public function, which is indispensable to reconstitute today's urban organization.

We have then to reflect on the wealthy heritage; rich vocabulary which was multiplied through historical periods by the hand of the concerned, architects or laymen.

Castro (GAU) applies an almost classical method of urban composition although he tries to avoid the self-contradiction of classicism, giving a new concept of architecture. On the other hand, Grumbach defined architecture as a "residuum" of time, taking off a pile of significations from it. Both show us that architecture must be an instrument that could stimulate and reorganize the public consciousness.

4. The "bienséance" of architecture
It was a moralistic intention that raised the conception of architects up to the problem of public urban spaces at the age of the Enlightenment. The theoreticians of that time called this concept the "bienséance" of architecture.

Originally this term was used in the field of classical literature. Throughout the 17th and 18th centuries, this concept varied from the inner "bienséance" which was related to a human character up to a public "bienséance" in touch with social customs. The architects and the theoreticians dared to employ it in order to explain the social "raison d'être" of this art. We can take into consideration the famous theoreticians of that period: Cordemoy and Laugier.

The reason why we have to refer to such a classical theory is that architects must find some tool to mould contemporary public spaces. The problem of modern society was already presented many centuries ago. Today, the architects who are engaged in the reorganization of urban spaces are required to deepen their awareness, not only of their own will, but also of the social character which this art is to express.

5. Architects, can they really assimilate ?

Everything is changing now; the social status of architects, their education and social consciousness. But where can they find a new possibility of creation ?

We have to return to the cities we live in, after a long period of expedition to unknown spontaneous villages. Whether the architects can assimilate to their own cities or not is now questionable. The younger generation of Paris reflects on the complicated historical background, regarding it as an open system of creation. In the future it will get more and more important to transform and modify the urban organization of cities. In that respect we would like to question again whether architects can really express their cultural and architectural identity in such process of reconstruction.

ARCHITECTURE AND THE OBVIOUS NECESSITY OF MEMORY

Antoine Grumbach

As early as the VIIIth century B.C., a new image of man gives increasing importance to Chronos (the myth of Time) as opposed to Mnemosuné (Poetical memory).※

This corresponds in the 19th century with architectural thinking pretending to become amnesic, or rather anti-historic.

From then on, the questioning of classical composition will find its justification in a new relation between space and time. Architecture organizes itself into a defense line which makes memory instrumental. Stretched to an absurd extreme, this attitude will result in the programmed obsolescence of "Design". This demagogic refusal to make decisions which involve the future tends to confuse the present with what is thus preventing us from being.

But there are signs indicating the return of Mnemosuné and in that respect, I will attempt to define how attracted we are by Fernand Braudel's concept of duration and to stress the importance of a slow-motion, almost immobile, form of history.

1. The forms of time

Because in architectural modernity, time is considered as a series of interchangeable moments, thus making a confused, so-called open industrialization possible, I am currently attempting to define what I call a "Reverse Archeology", i.e. an architectural practice which involves designing public spaces as remnants of an imaginary town, supposedly in existence before the new one.

2. The forms of memory: The cut-through

The Hidden Figure / The Schizophrenic Body Yesterday, while observing the glass-roofed arcades that cut through 19th Century Paris, I felt deeply concerned about the contemporary representation of the human body and its architectural or architectonic correspondance.

I then realized that, instead of the squaring of the circle, modern practice had most strangely used the diagonal of the square, a cut-off, a severing, a symbolical wound. And indeed, the more projects I considered (Le Corbusier, The Visual Arts Center of Harvard, Louis Kahn, the competition for la Roquette, an issue of a magazine about Plateau Beaubourg), the more obsessed modern architects seemed to be with this concept of cut-off. Furthermore the works of Lacan and Deleuze on schizophrenia seemed to give philosophical evidence for such a concept.

I then conceived the main task was not to go on with architectural analogies but to gather representations of the split, severed body (as designed by Duchamp for instance) and to parallel them tentatively with the hidden patterns of new architecture.

And since it now seems obvious through the work of Panofsky that the squaring of the circle (Man at the Center of the Cosmos) had an architectural correspondance in the centered plan, one can wonder whether the appearance of the cut-off theme corresponds with the most split up representations of the body. This question is worth pondering over, since there is no other space than the space defined by the body.

3. Reverse Archeology

It seems difficult for the architect-acrobat to deal with the thread that connects past and present. Right now, architects are very reluctant to claim new forms and, not daring to venture on the thread, they stage a set of quotations and architectural patterns resulting in original collages, multi-referential works.

In the last twenty-five years, amnesic urban compounds were hastily built, while whole neighborhoods were destroyed. Architects of the Modern Movement intended to replace the old city patterns with a new one, by eliminating every sedimentary aspect in them. But, due to an over-confidence in the scientific approach, the thread tightened and broke. TEAM X then healthily reacted by stressing the necessity of urban continuity and of its support, the street. But, though it stresses the invariance of the city, the idea of continuity and its physical support are so literally superposed, that this search for continuity does

6階一舶来家具コーナー

新宿・西口

京王
百貨店

木曜定休 電話342-2111大代表

not confer a poetical dimension (a memory) to the city.

In their search for a new answer to this problem, Candilis, Josic and Woods have partly successfully designed on their project for the University of Berlin, a system of continuous progression, detached from the form and development of buildings.

More recently, the issue has evolved into a limitless piling up of forms with no reference to previous research into the articulation of private and public space.

Some architects though, like Louis KAHN, VENTURI, GREGOTTI and ROSSI seem to be willing to tighten the thread and investigate into the postical function of architecture. This new direction seems to imply that the forms of memory in urban composition do not reside in these attempts to imprint time in the clefts.

My work defining itself as a criticism of the lack of memory and poetry in new urbanization, the Eupalinos Corner Project and the Partition III project are two very representative examples of it. Both 1,500 housing units projects set very deliberate clefts within the urban tissue and introduce themselves as a memory, by virtue of these clefts. Eupalinos Corner inserts itself into the criticism of classical composition by redistributing the components (symmetry, axis, etc. . . .) and designing two definite sets of housing separated by a triangular residual space.

Partition III defines the limits of a systematic organization and tries to replace the partition between two stages of urbanization by accidents such as happened in ancient cities.

In these two cases, the cut-through belong to the process I term reverse archeology and call to mind a certain philosophy of the city. The sedimentary aspect of the City and all its residual space are always the result of a deliberate intervention.

Thus today, by attempting to artificially create a memory, some projects allow themselves to design the accidents, cut-through and other urban lapses as the new artefacts of urban composition and announce the return of an exile: Mnémosuné.

(Translation: Isabelle Famchon)

※CF. Jean, Pierre. Vernant "MYTHE ET PENSÉE CHEZ CES GRECS"

編集協力・執筆者プロフィール

三宅理一

1948年 東京都に生まれる

1972年 東京大学工学部建築学科卒業

1974年 同大学院工学系研究科修士課程終了

現在 同博士課程 75年からフランス政府給費生としてエコール・デ・ボザールおよびパリ大学に留学中

古林繁

1947年 北海道に生まれる

1970年 日本大学理工学部建築学科卒業

1970年 同大学院修士課程

1971年 ローマセンターに留学

現在 73年よりエコール・デ・ボザールに留学中